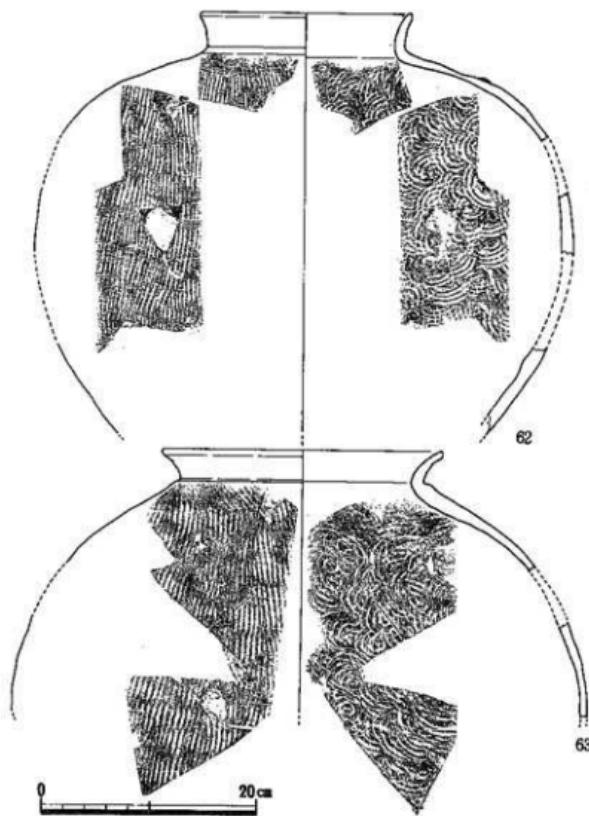


第19図 堆積土層内出土須恵器(2) (%)

48は縁の口縁部で、沈線と波状文が施されている。49も縁で、体部中央に一条の沈線を有する。丁寧な作りである。

50～55は底である。50は把手の部分である。51・52は小形底で、51は体部外面下方に、52は底部外面に笠記号を施す。53は底部外面に、「×」印の笠記号がみられる。54は回転糸切り痕を残している。55は外面体部と底部の境目に平行叩き目文が施されている。

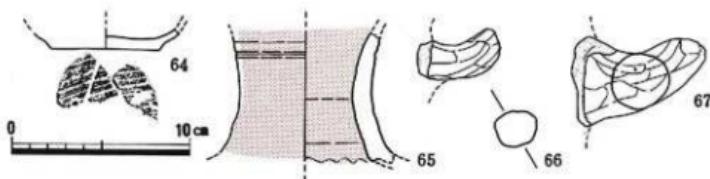
第19図56は、鉢と思われる。57・58は、瓶かあるいは鍋の口縁部ではなかろうか。59は底で、把手を付し、円孔が底部に一か所につき2穴穿かれている。60はミニチュアの上製支脚で、須恵質というのが珍しい。池ノ奥△遺跡でも須恵質のミニチュア品が1点。さらに、中形品が1点出土している。61、第20図62・63は大底である。61には、口頸部に平行叩きの押し当て具の木口部分が当たった痕がみられる。



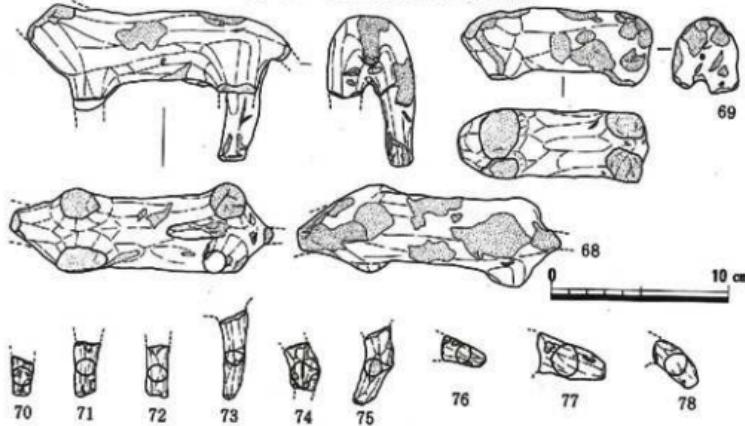
第20図 堆積土層内出土須恵器(3) (3)

土師器（第21図）は、壺・壺・把手・蓋が出土している。64は小形の壺で、静止糸切り痕を残す。65は長頸壺の頸部で、内外面ともに赤色塗彩を施している。66・67は把手で、66は小形品である。

土馬（第22図）は、須恵質のものが出土しており、11点を数える。完形に近いものは1点もない。胴部が2体、脚部が6本、尾が3点で頭部は出土していない。68は裸馬で、頭部、尾、右後肢を除いた3肢が欠損している。尻に範状工具で肛門孔を穿ち、股間には男根を表現する粘土を貼り付けている。69も裸馬で頭部、4肢、尾を欠損している。尻に1孔を穿ち肛門を表現している。性別は不明である。74・75は、同一個体の脚部と思われ、形態的には馬よりも牛の脚ともみえる。



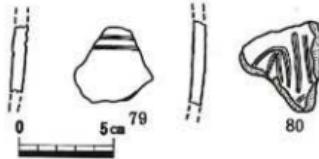
第21図 堆積土層内出土土器(%)



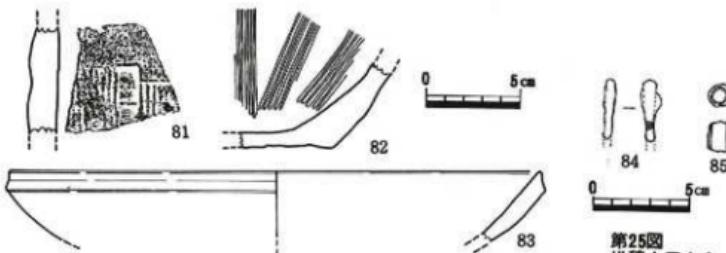
第22図 堆積土層内出土土器(%)

第23図79・80は、繩文式土器片で後期のものであろう。

第24図は、中世の陶器である。81は常滑焼、82は備前焼の摺鉢、83は龜山焼系統の皿と思われる。



第23図 堆積土層内出土繩文式土器(%)



第24図 堆積土層内出土中世陶器(%)

第25図  
堆積土層内出  
出土鐵製品(%)

第25図84・85は、鉄製品である。

土器は、38点出土している。土師質のものが大半を占めるが、須恵質のものが2点みられる（土師質；136頁第95図390～425、須恵質；137頁第96図494・495）。

## 註

註1 島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』1984年

註2 烏羽市教育委員会『島羽遺跡』1975年 の石器分類法による。

註3 山本清「山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』1971年

## [C-1(西)～E-2区]

A-1～C-1(東)区西側のつづきに位置するが、畠の境界の石組によって一段高くなっている。

表土から最下層の地山までの間、C-3・D-3区の拡張区の土層を含めて19層に分けられる。深さは、谷間中央部の1・2区間畦畔のところで、0.7～1.8mを測る。地山は、E-1区ではやや赤みを帯びているが、明褐色を呈している。（77～78頁第4図）

調査の結果、三つの遺構面を検出した。遺物は、小範囲にしかみられない2層、3層、7層、14層以外の層全てから出土している。また、表土、9層暗褐色弱粘質土までの堆積土層、および、第1遺構面上の覆土である12層黒褐色粘質土内から、池ノ奥C遺跡の特殊土器片が38片も出土している。

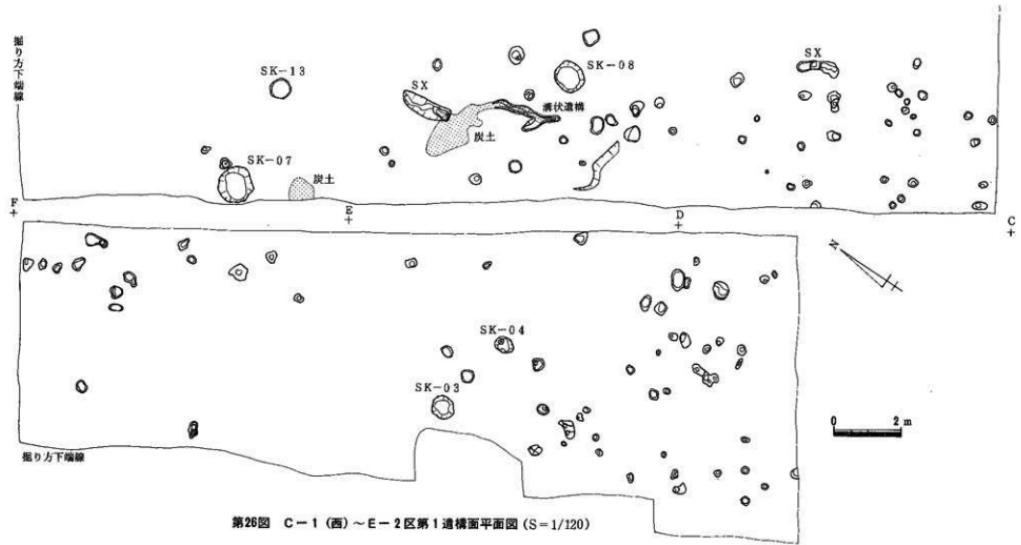
### ○第1遺構面

17層明褐色粘質土上面で検出した遺構面で、A-1～C-1(東)区の第1遺構面のつづきであると思われる。円形焼土壙4基（SK-03・04・07・08）、円形土壙1基（SK-13）、ピット106穴、炭土2所、溝状遺構1所、性格不明遺構2所を確認した。ピットは、形状、法量ともに大小様々でまとまりがなく、建物とはならなかった。（第26図）

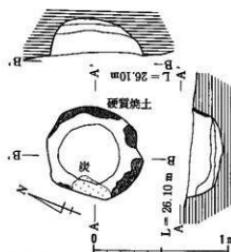
ピット内から、内外面ともに赤色塗彩を施した土師器片（99頁第37図152）、須恵器長頸壺の口頸部片が出土しているが、どのピットかは不明である。

SK-03（第27図）：平面プランはほぼ円形を呈している。上端径71×66cm、下端径45×43cm、深さ24cmを測り、や中小型である。南側および東側の壁面上部がよく焼け締まっている。土壙内の堆積土は、上層炭少量含む褐色土、中層炭を多く含む褐色土、下層は炭化物層の3層に分かれる。土器片はみあたらなかった。

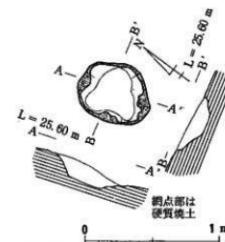
SK-04（第28図）：平面プランは梢円形をしている。上端径55×45cm、下端径38×36cm、



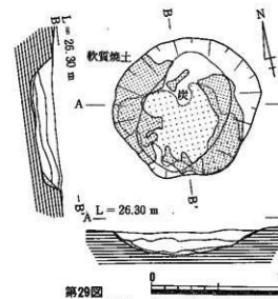
第26図 C-1(西)～E-2区第1造様面平面図(S=1/120)



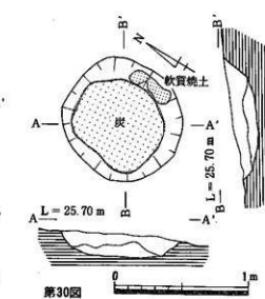
第27図  
D-1区SK-03実測図(S=1/30)



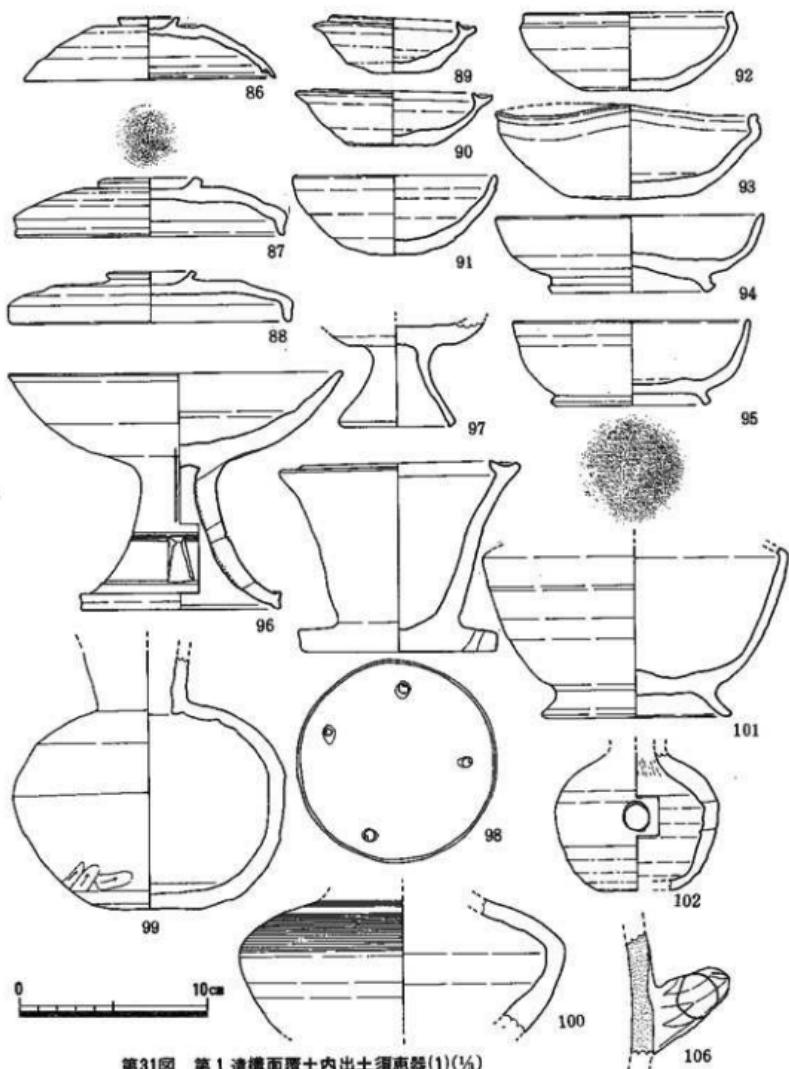
第28図  
D-1区SK-04実測図(S=1/30)



第29図  
E-2区SK-07実測図(S=1/30)



第30図  
D-2区SK-08実測図(S=1/30)

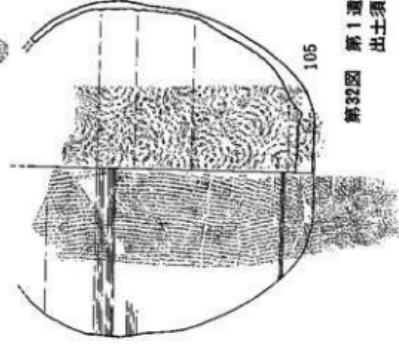
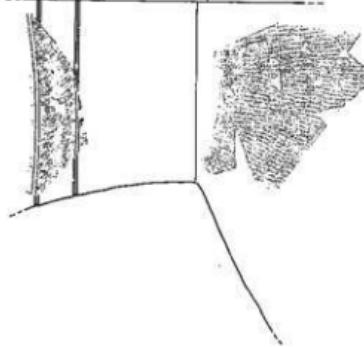
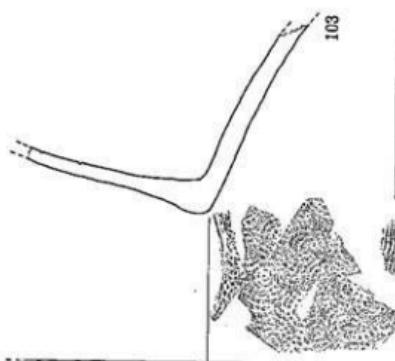
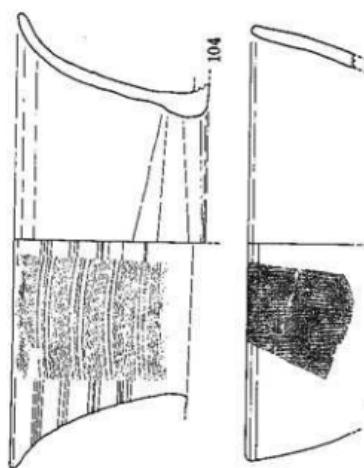


第31図 第1造構面覆土内出土須恵器(1)(%)

深さ12.5cmを測り、小型の円形焼土壙である。壁面はよく焼けているが上縁部だけである。床面に焼土はなかった。土壙内の堆積土は暗褐色土一層で、炭が混じっていた。土器片は入っていたなかった。



第32図 第1道標面覆土内  
出土須恵器(2)(1)

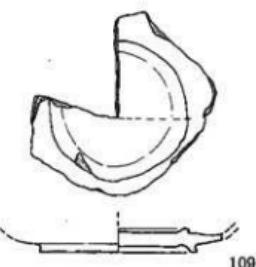


SK-07 (第29図)：平面プランは梢円形をしている。上端径90×85cm, 下端径55×42cm, 深さは19cmを測る。東西両側の壁面から床面の一部に軟質の青黒色焼土が残っており、厚さは東側壁面下端で最大50mmを測る。土壇内の堆積土は4層に分かれ、上層疊混じりの暗赤褐色土、中層ブロック・炭混じりの黒灰褐色土、下層炭・灰を多量に包含した黒灰色土、最下層赤褐色土であった。土器片は入っていないかった。

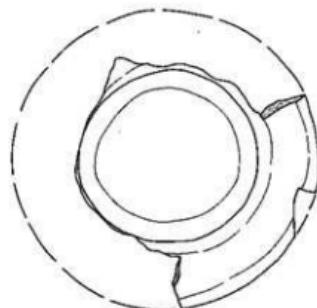
SK-08 (第30図)：平面プランはやや梢円形を呈している。上端径90×85cm, 下端径55×42cm, 深さは19cmを測る。壁面はあまり焼け締まっていない、床面にも焼土はなかった。土壇内の堆積土は、上層炭化物・疊混じりの暗灰褐色土、下層炭土の2層に分かれた。土器片はみあたらなかった。

覆土内および遺構面上から、須恵器、土師器、石器、中世の陶器片が出土している。

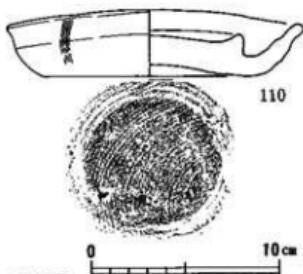
第31～33図は覆土内から出土した須恵器であり、蓋・杯・高杯・鉢・壺・罐・甕・把手・瓶・横瓶がみられる。86～88は蓋で輪状つまみを有し、86は口縁にかえりが短く付き、87・88は口縁部が短く直立するもの。89～95は甕である。89・90は小形の杯で立ち上がりは短く内傾している。高広編年のⅠ A期。91も小形の杯で、半球状を呈している。やはり高広編年のⅠ A～Ⅰ B期か。92・93は、口縁部が屈曲しており、93の底部は静止糸切り後ナデ調整を施す。高広編年のⅠ A～Ⅰ B期か。94は高台付杯である。95の底部外面には、「-」の範記号がある。高広編年のⅠ B～Ⅳ A期か。96・97は高杯で、96の脚部には三条の沈線と、上段は切り込みに過ぎないが二段二方向の透しがみられる。98はジョッキ型の鉢か。底部を円盤状の台座にして安定させ、体部から口縁は朝顔状に開き、口縁部の立ち上がりは短く内傾している。台座（底部）外面よ



109

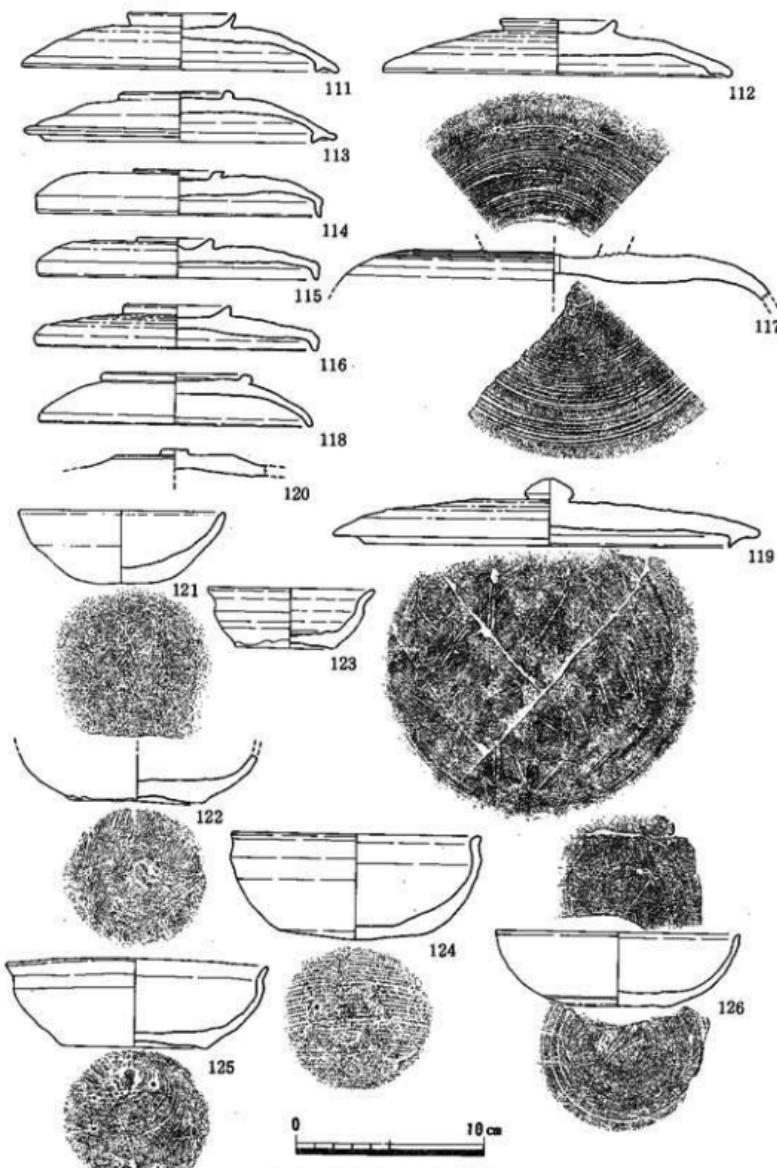


110

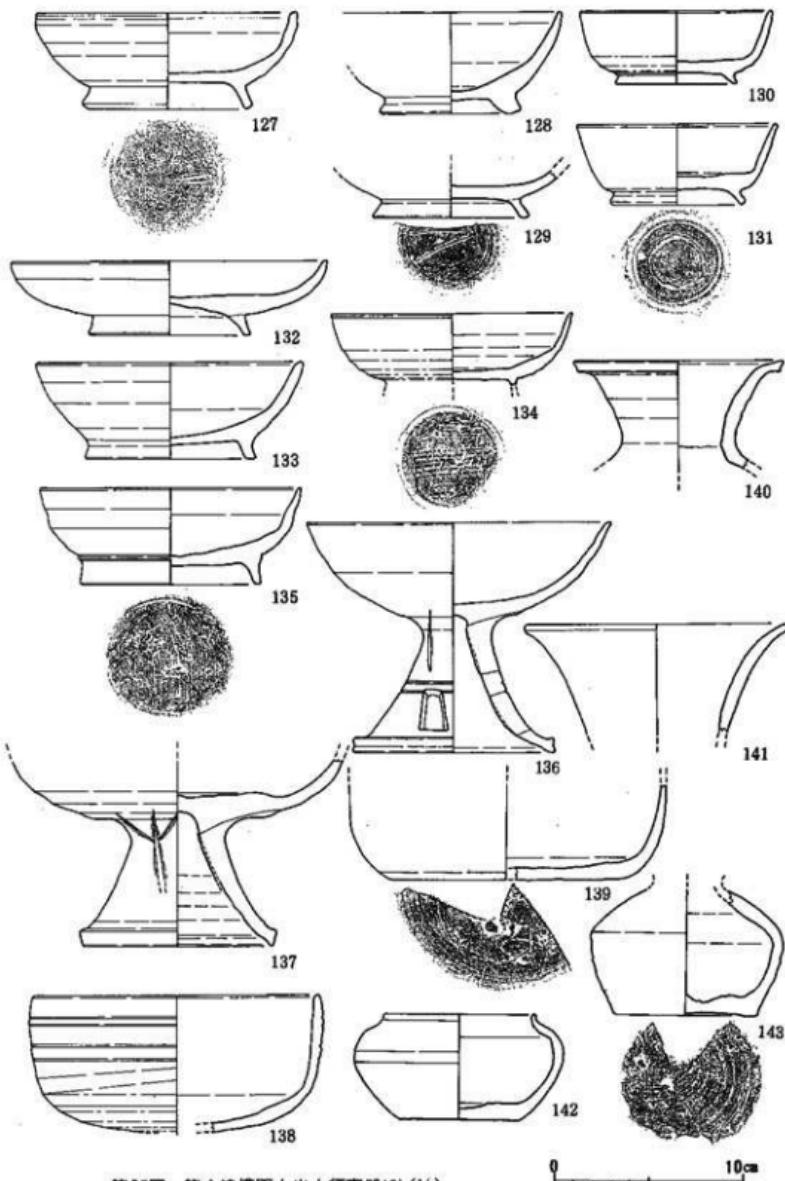


0 10 cm

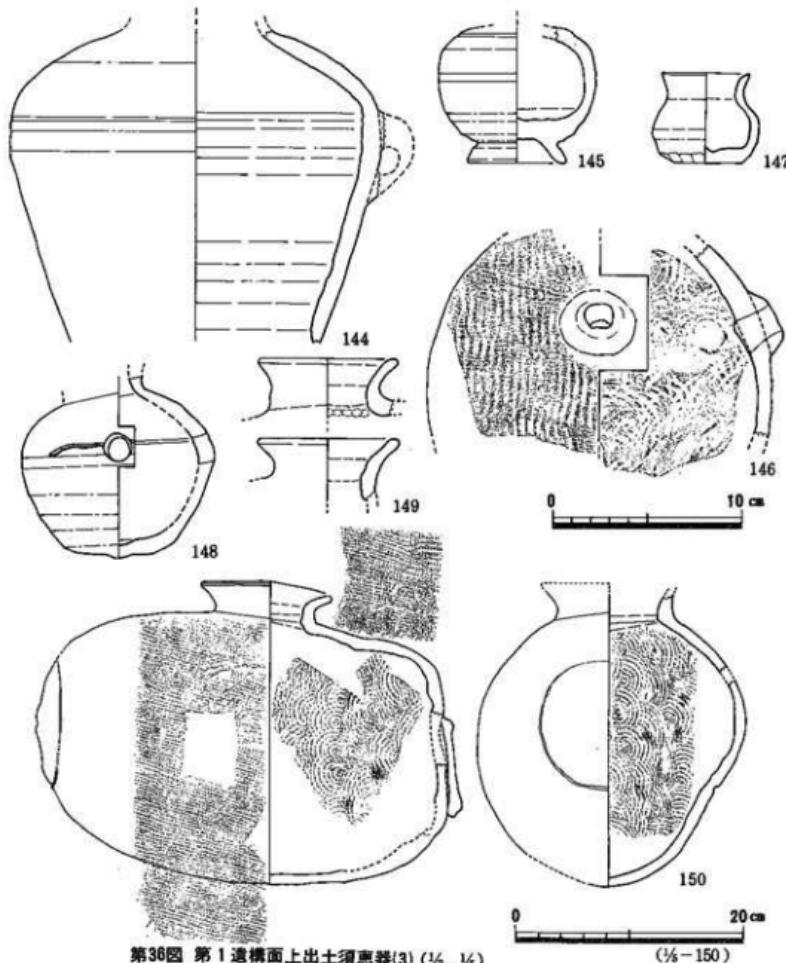
第33図  
第1遺構面覆土内出土須恵器(3)(%)



第34図 第1遺構面上出土須恵器(1) (1/2)



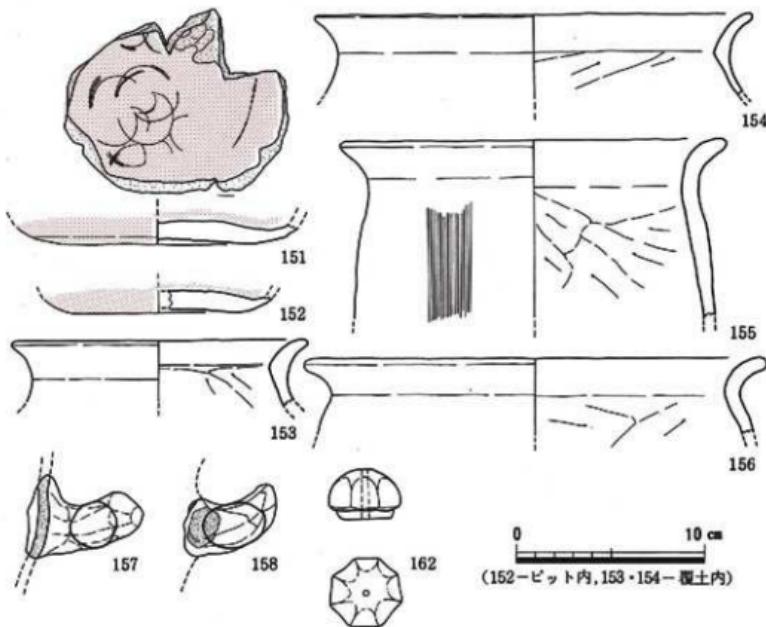
第35圖 第1造構面上出土須惠器(2) (1/2)



第36図 第1遺構面上出土須恵器(3) (1/5, 1/5)

(1/150)

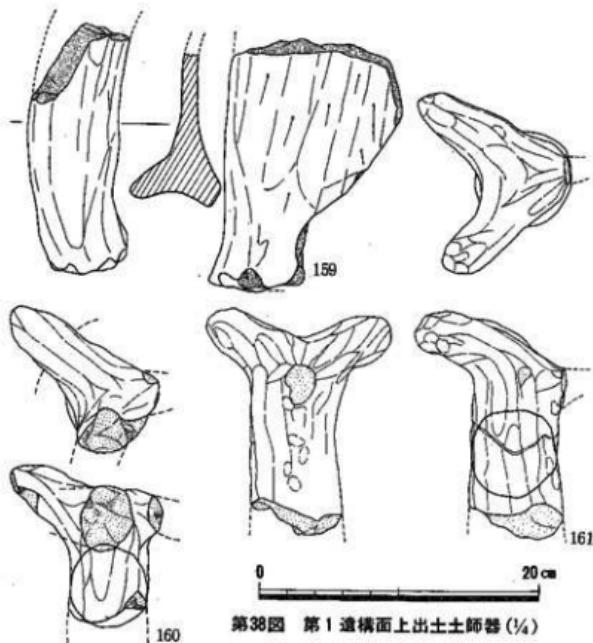
り外上方へ向けて、4か所穿孔している。台座に円孔はないが類似した土器が、池ノ奥窯跡群の灰原地区（表採）、近くの萬沢A遺跡<sup>註1</sup>、および、安来市の高広遺跡から出土している。この4か所の円孔は、どのような意味を持っているのだろうか。99～101は壺である。99・100は長頸壺で、101は高台を付している。102は縁で外面に自然釉が付着している。第32図103～105は甕である。第31図106は瓶か鍋の把手と思われる。先端部に切り込みを



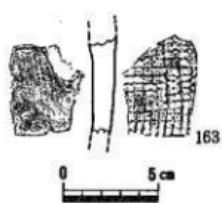
第37図 第1造構面上および覆土内出土土器器(%)

入れている。第32図107は瓶か鍋の口縁部。108は横瓶で、肩部に「×」印の範記号がみられる。第33図109は托と思われる。110は円面覗か。陸部に使用痕跡は認められず、一定方向の静止ナデがみられる。底部外面には静止糸切り痕を残す。

第34～36図は造構面上出土の須恵器である。111～113は、輪状つまみを有し口縁内面のかえりが付く蓋である。高広編年のⅠA～ⅡB期。114～116は、輪状つまみを有し口縁部が短く直立するもので、高広編年のⅢB～ⅣA期か。117は大形の蓋で、輪状つまみが剝離した真があり、天井部中心に円孔を穿き、外側面に櫛状工具によるカキ目調整が施されている。円孔の意味は不明である。118も蓋と思われ、口径の大きな輪状つまみを有し、静止糸切り痕を残している。119は大形の蓋で、宝珠状のつまみを有し口縁内面のかえりは鋭い。高広編年のⅢA期か。120は、乳頭状のつまみを有する蓋である。121～126は、無高台の杯である。121は高広編年ⅠA期の杯か。122の底部内面には、「上」印の範記号がみられる。123は小形の杯である。124・125は静止糸切り痕を残す。高広編年のⅢB～ⅣA期か。126には、底部と体部の境目に櫛状工具による沈線状のものが、一～三条施さ

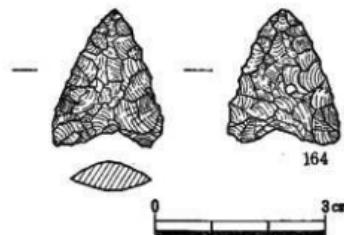


第38図 第1造構面上出土土器(1/4)



第39図

第1造構面上出土中世陶器(1/2)



第40図 第1造構面上出土石鎌(1/4)

れている。第35図127～135は高台の付く壺である。127・129は底部外面に箋記号が施されている。134・135には、静止糸切り痕がみられる。136・137は高壺である。脚部に、136は二条の沈線と二方向の上段切り込みで下段は台形の透しを施し、137は二方向に切り込みを入れ、片側は「丫」形を呈している。138は鉢で、四条の沈線を施している。139も鉢で、底部外面に「上」印の箋記号がある。140～143、第36図144～146は壺類である。140・141は、長頸壺の口頸部である。142は短頸壺である。143の底部は、静止糸切り後ナデ調

整を施している。144は長頸壺の胴部で鉢の剥離痕がみられる。145は高台の付く小形壺である。146は、胴部に円孔があるが意味不明。第36図147は壺で、底部から上1cm弱ぐらいうまでの間に、粗い範削りの痕がみられる。148は壺で、胴部上半に一条沈線が入るが一周していなく中途で切れている。粗雑な感じで焼成不完全か。149は提壺の口頭部か。150は横瓶であるが、非対称で全体に大きく歪んでいる。肩部に「×」印の範記号がある。

第37・38図は、遺構面上および覆土内から出土した土器で、内外面ともに赤色塗彩を施し暗文を入れた壺、甕・把手、甌・土製支脚がみられる。また、第37図162は土師質の土製品で、つまみあるいは栓のような形状をしており、上部は8面取りをし中央部に円孔が上下に貫通している。

第39図163は、中世の陶器片で亀山焼系統のものであろう。

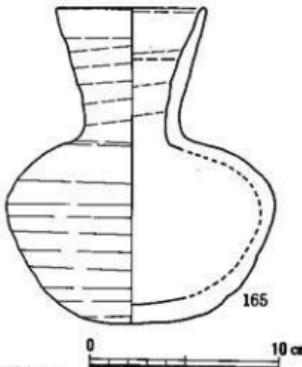
第40図164は、鋳型凸三角形をした黒耀石製の石鎌である。

#### ○第2遺構面

1区側では地山面、2区側では19層明茶褐色粘質土上面にあたる遺構面である。やはり、A-1~C-1(東)区の第2遺構面のつづきであると思われる。ピット71穴を検出した。このピット群は不規則に並び形状、法量とともに大小様々であり、建物とするには至らなかつた。ピットの法量は最大25×30×30cmから、最小15×15×10cmであった。P1内から、ほぼ完形に近い須恵器長頸壺(第41図165)が出土した。(第42図)

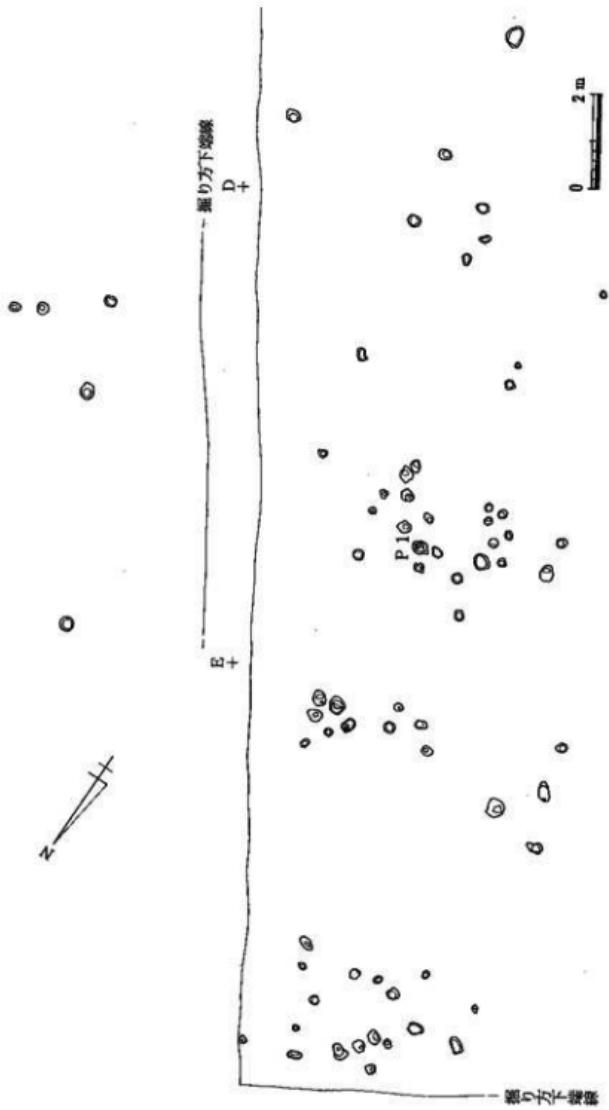
覆土内からは、須恵器と少々の土器片が出土している。しかし、この遺構面上からはP1内出土の須恵器長頸壺以外には少量の土器片しか出土していない。

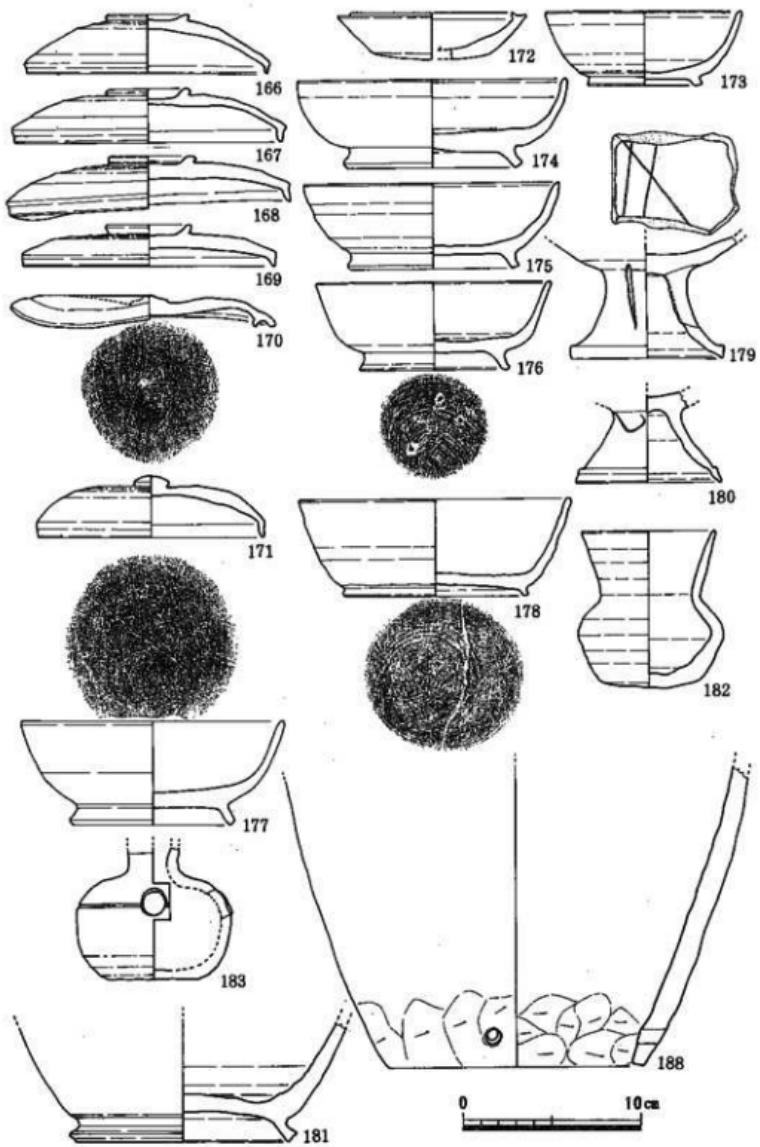
須恵器(第43・44図)には、蓋・壺・高壺・壺・甌・甌・瓶がみられる。166~169は蓋で、輪状つまみを有し口縁部が短く直立するもの。169の外面は他の土器を重ねられなかったところが赤茶灰色に発色している。高広編年のⅡB~ⅣA期。170は口縁内面のかえりが付き、天井部内面に「×」印の範記号があり、171は口縁部が短く直立し、ともに宝珠状つまみを有するもの。172は無高台の壺で、立ち上がりが短く内傾するもの。173~178は、高台の付く壺である。176は、底部外面に静止糸切り痕を残すもの。177は、底部内面に「×」印の範記号がみられる。178は高台が底部と体部の境目付近に付き、体部は直線的に開いている。底外面に回転糸切り痕を残し、高台を貼り付けた時につけたと思われる



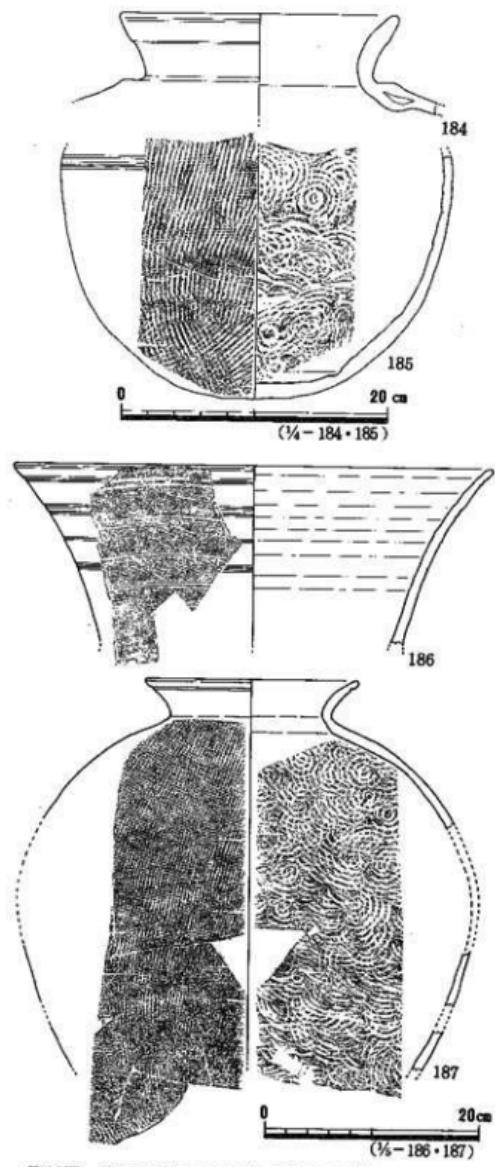
第41図  
第2遺構面P1内出土須恵器(165)

第42図 C-1(西)～E-2区第2連続面平面図 (S=1/120)



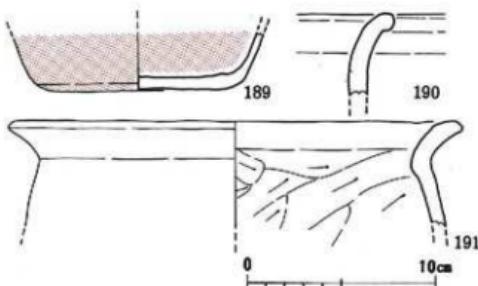


第43図 第2構面埴内出土須恵器(1) (1/2)



爪痕がみうけられる。高広  
編年のIV B期か。179・180  
は高杯である。179は脚部  
の二方向に篦による切り込  
みが貫通し、杯部内面には  
「ヰ」印の薄い篦記号がみ  
られる。180の脚部も「釣  
り針」型の篦記号がみられ  
る。181は高台を付す壺で、  
182はやや大きめの壺であ  
る。183は壺で、体部上半  
に薄い沈線を一条入れる。  
第44図184～187は甕である。  
第43図188は壺で、底部の  
穿孔は4方向と思われる。  
第45図は土師器で、内外  
面とともに赤色塗彩を施した  
壺や甕類がみられる。

第44図 第2造構面覆土内出土須恵器(2)(1/4, 1/6)



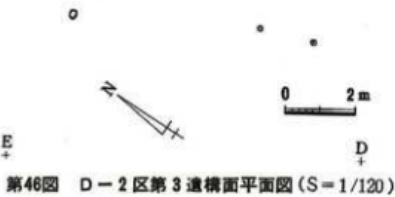
第45図  
第2遺構面覆土内出土土器(3)

○第3遺構面

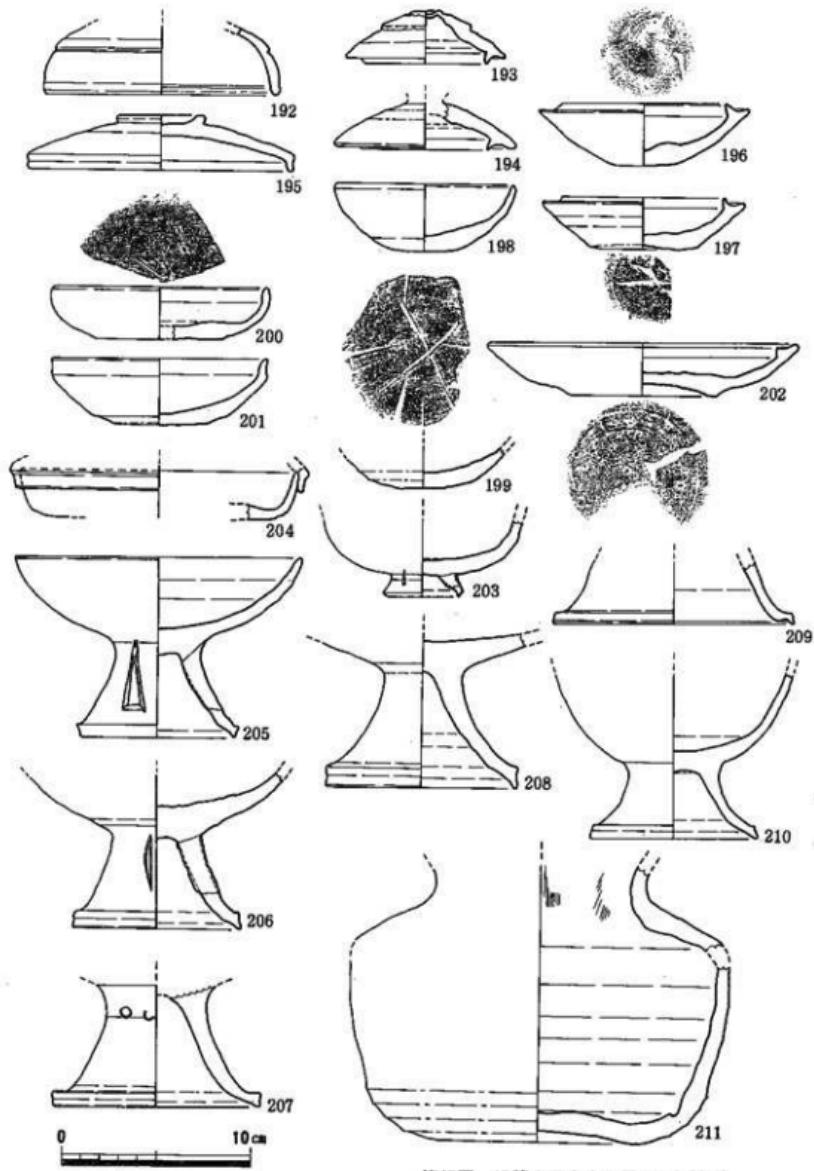
D-2区地山面で検出した。小ピット3穴以外の遺構はみあたらなかった。この地山面からは、土器片も3片しか出土していない。(第46図)

○表土および堆積土層からの出土遺物

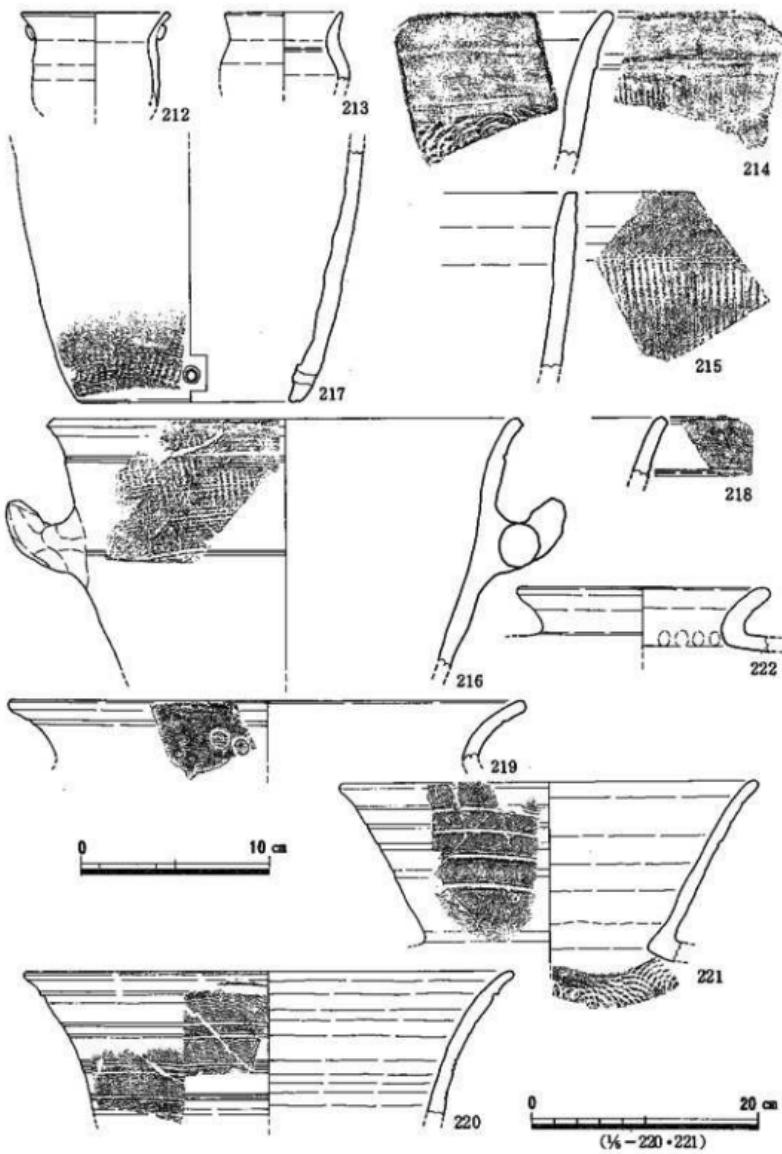
須恵器(第47~49図)は、蓋・杯・高杯・鉢・壺・壙・瓶・甕・横瓶と様々な器種が出土している。192~195は蓋である。192は山本編年のⅢ期。193・194はかえりの付いた小形の蓋で、194には宝珠状つまみが付いていたと思われる。195は、口縁が屈曲し輪状つまみを有している。196・197は高広編年のⅡA期のもので、範記号を付している。198も高広編年のⅡA期。199・200は、底部内面に「×」印の範記号がある。201は屈曲口縁の杯で、202は回転糸切り痕を残す。203は低脚付きの壺か。204は蓋と杯との重ね焼きの破片である。205~210は、高杯である。205は脚部に二方向の一段透しを、206は二方向の切り込みをもち、207には竹青文が二つみられ、208は透しも切り込みもない。209の外表面は、赤茶褐色を呈しており柿渋を塗り付けたものか。210も低脚の高杯か。211は平底の壺である。第48図212・213は壙で、212には頸部にボタン状の飾りが付き、213は内面に一条の沈線を巡らしている。214~217は瓶で、217の底部内面に円孔を穿つ時の指押さえの痕がみられる。218~221は、甕である。218は薄い波状文と沈線がみられ、219には竹青文が二つ残っている。220・221は大甕の口頸部で、櫛描波状文と沈線が施されている。222は横瓶の口頸部である。第49図223は壙の破片で、イガラビ1号墳出土の壙とは違うタイプのものである。224は硯の破片か。225は須恵質の灯明皿で、三段重ねで一体化しており、巧妙



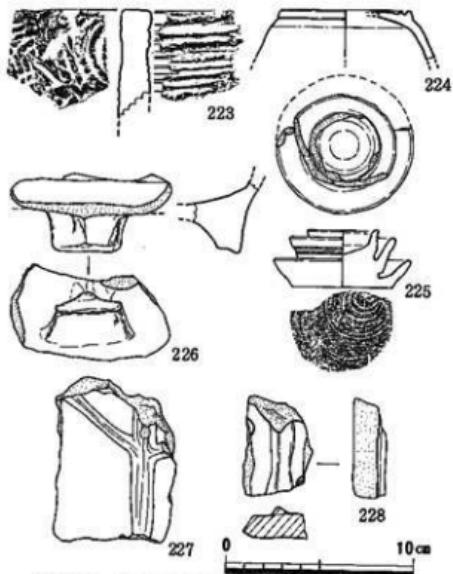
第46図 D-2区第3遺構面平面図(S=1/120)



第47圖 堆積土層內出土須器(1)(%)



第48図 堆積土層内出土須恵器(2)(1/2, 1/2)



第49図 堆積土層内出土須恵器(3)(%)

に作られているので接合痕はわからない。底部に回転糸切り痕を残す。226は須恵質のもので形態不明。底部はゆるやかな丸みを持ち、内面にカキ目調整を施す。脚部は低く三角柱状になっている。生焼けのためか外面灰褐色、内面淡赤褐色を呈している。また、227・228の2片は、池ノ奥C遺跡の特殊土器片で、池ノ奥C遺跡発見以前に出土したものである。

第50図は土師器類である。229は土師質土器片で、内外面にカキ目がみられる。230は内外面ともに赤色塗彩を施した杯で、回転糸切り痕を残す。231・232は壺・甕

類で、胴部外面は刷毛目調整を、内面は箇削りを、231は口頸部内面にも刷毛目調整を施している。233は壺で、234・235は土製支脚である。

土馬（第51図）は、須恵質のものが4点出土している。236は胴部だけ残存している。股間に粘土を貼り付け男根を表現しており、胴部に比して頭部はかなり大きいように思われる。焼成前に柿渋を塗った可能性があり、赤褐色に発色している。237は脚の一部、238・239は尾の部分である。

第52図240・241は中世の陶器片で、亀山焼系統のものであろう。

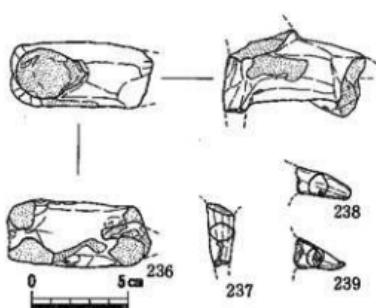
土鍤も47点出土しており、1点だけ瓦質のもの（137頁第96図496）で、他はみな土師質である（136頁第95図430～449、137頁第96図450～475）。

#### 註

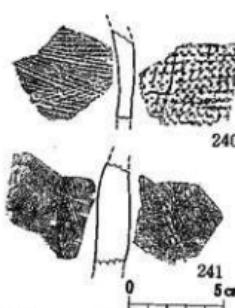
- 註1 松江市教育委員会『鹿沢A遺跡、鳴沢B遺跡、別所遺跡』1988年  
註2 島根県教育委員会『高庭遺跡発掘調査報告書』1984年



第50図 堆積土層内出土土師器 ( $\frac{1}{3}$ ,  $\frac{1}{4}$ )



第51図 堆積土層内出土土馬(%)



第52図  
表土および堆積土層内出土中世陶器(%)

#### [F-1~G-2区]

表土から最下層の地山までの間に14層を数える。深さは、谷間中央部の1・2区間畦畔のところで、1.0~1.4mを測る。地山は、2区側では赤みを帯びているが、概ね明褐色を呈している。(第53図)

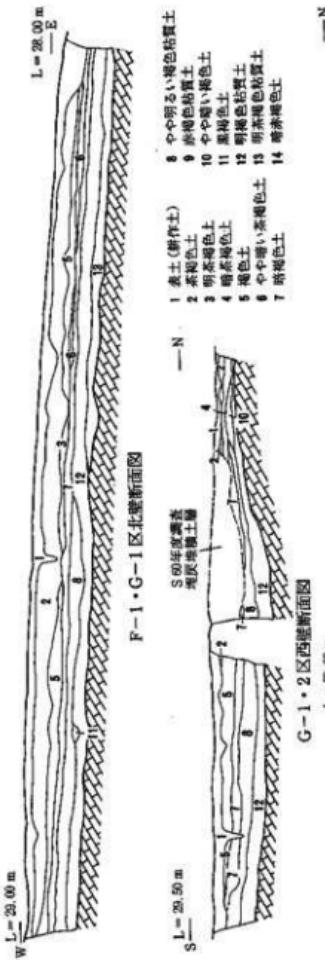
調査の結果、三つの遺構面を確認した。遺物は、小範囲にしか存していない3層、9層、10層、11層、14層以外の層全てから出土しているが、量的には東側のA~E区に比べるとかなり少ない。また、表土および7層暗褐色土までの堆積土層内に、池ノ奥1号墳の須恵器片16片、池ノ奥C遺跡の特殊土器片3片が紛れ込んでいた。

#### ○第1遺構面

G区側では8層やや明るい褐色粘質土上面、F区側では12層明褐色粘質土上面にあたる遺構面である。円形土壙1基(SK-14)、ピット50穴、炭土2所、性格不明遺構1所を検出した。ピットは、A~E区の各遺構面のピット群と同様に、形状、法量ともに大小様々でまとまりがなく、建物とすることはできなかった。(第54図)

SK-14：平面プランは梢円形を呈している。上端径50×38cm、下端径43×32cm、深さは8cmを測る。壁面には焼土はみあたらないが、南側床面に固く焼け錠った焼土が、堆積していた。土壙内の堆積土は暗褐色土だが、炭の量により、三つに分けることができた。

第55図は、覆土内から出土したもので全て須恵器である。土師器は、図化できるもののがなかった。242・243は杯である。242は半球状のもので、底切り後外面は回転ナデを施している。243は低脚の付く杯。脚部だけ残存。244は壺で、肩部内面に指頭圧痕がみられる。245~248は、壺である。248は、頸部から肩部にかけて沈線が施されている。249は把手の部分。250は壺の口頭部。



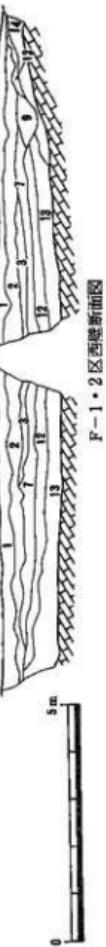
### ○第2造構面

G区において、第1造構面下約16~36cmのところにある12層明褐色粘質土上面で検出した造構面である。円形焼土壙2基(SK-10・11)、ピット18穴、焼土2所、炭土2所を確認した。ピット群から建物を組むことはできなかった。(第57図)

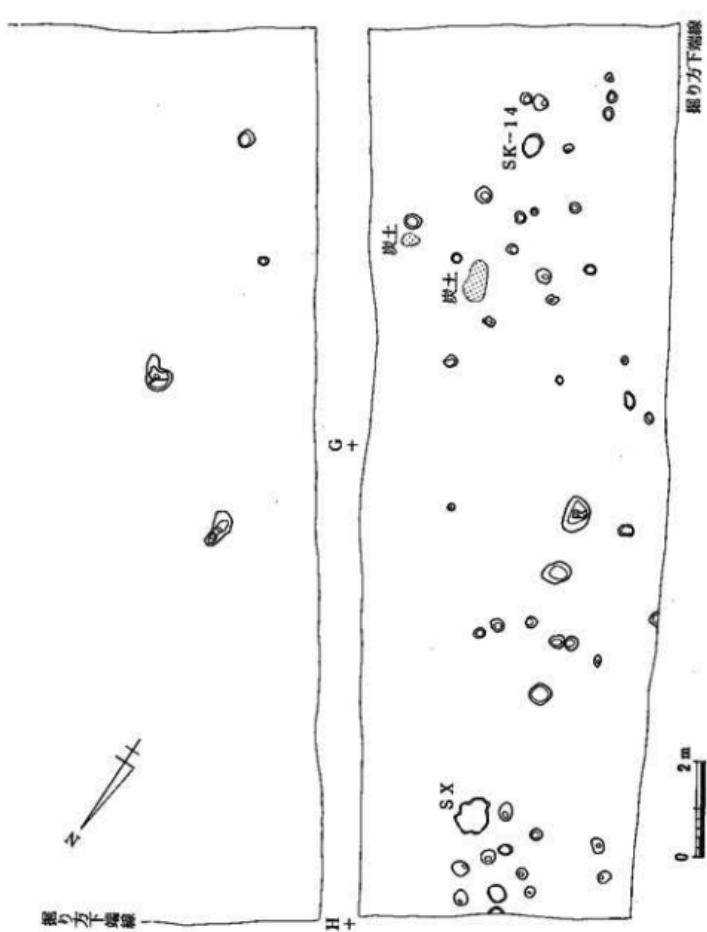
SK-10(第58図): 平面プランは橢円形を呈している。上端径125×110cm、下端径95×80

第56図は造構面上から出土したもので、259は土師器の壺類で、他は須恵器である。251は蓋で、宝珠状つまみを有し周間に回転糸切り痕を残している。252は壺で、底外面に回転糸切り痕を残し、体部はやや丸みを帶びている。高広編年のIV A期か。253は小形壺で、254~258は壺である。壺は平底をしており、切り離しは笠切りである。256は肩部にボタン状の飾りが三つ貼り付けである。

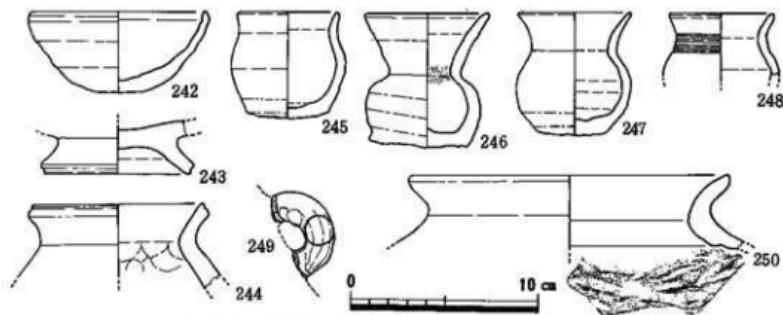
第58図 F-1・G-2区断面図(S=1/120)



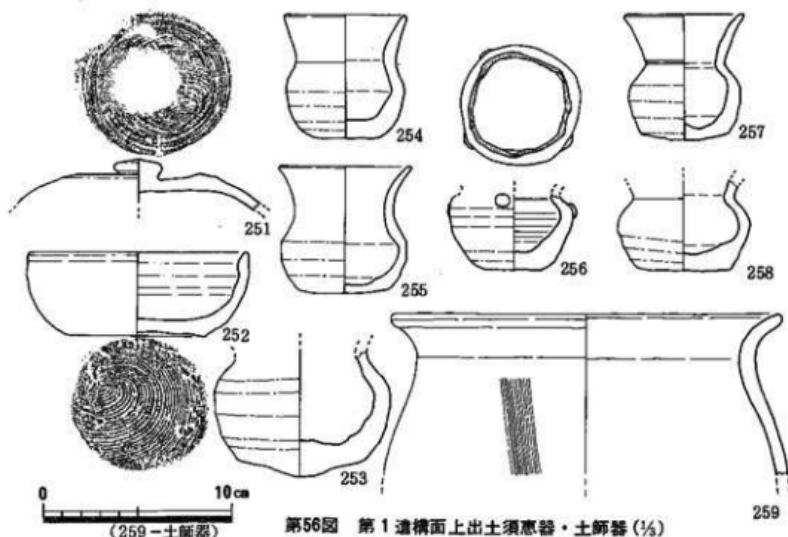
第54図 F - 1 ~ G - 2区断面平面図 ( $S = 1/120$ )



cm、深さは32cmを測る。東側から南側にかけての壁面は、厚さ最大で25mmを測る硬質の青灰色焼土に、北西側の壁面では、やや硬質の製の付いた茶褐色焼土となっていた。床面には焼土ではなく、小ピットが3穴 ( $15 \times 13 \times 20\text{cm}$ ,  $15 \times 13 \times 17\text{cm}$ ,  $10 \times 8 \times 6\text{cm}$ ) あった。土壤内の堆積土は、上層炭の混じったやや暗い褐色土、中層炭の混じった褐色土、下層炭土、そして最下層褐色土の4層に分かれた。最下層上には、壁面から崩れ落ちたと思われ



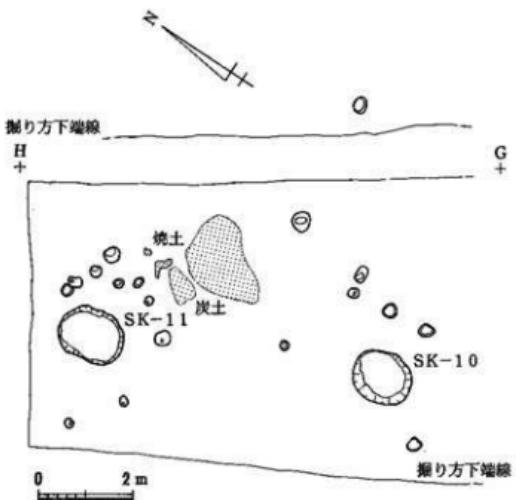
第55図 第1造構面覆土内出土須恵器(%)



第56図 第1造構面上出土須恵器・土師器(%)

る硬質の青灰色焼土、および、やや硬質の茶褐色焼土がみられた。土器片は混入していないかった。

SK-11(第59図)：平面プランは梢円形を呈している。上端径139×105cm、下端径120×90cm、深さ25cmを測り、本遺跡で一番大きな円形焼土壇である。壁面上部のところどころ、および、床面の一部が硬質の青灰色焼土に、床面の数か所が硬質の茶褐色焼土に覆われていた。土壇内の堆積土は3層に分かれ、上層炭を含むやや暗い褐色土、中層炭を含む褐色土、下層炭土であった。土器片は入っていないかった。

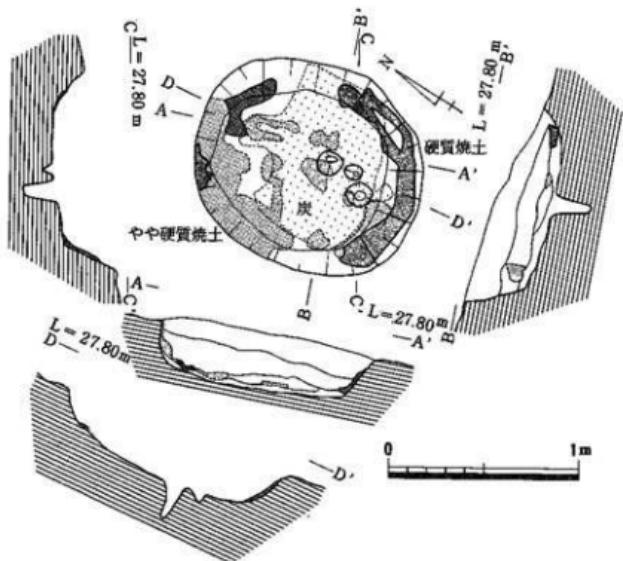


第57図 G-1・2区第2構造平面図(S=1/120)

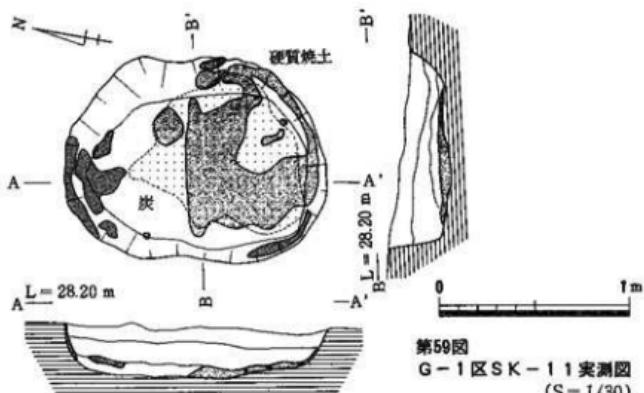
第60図260～262は、覆土内から出土した須恵器で、  
260・261は小形の壺である。  
261は、底部が平坦で「×」印の範記号がみられる。  
262は小形壺か。263～265は、遺構面上から出土した  
壺で、平底をしている。  
263・264の切り離しは範切りである。

また、第61図266は覆土内から出土した縄文式土器片である。外面の突部に刺突文があり、二条の沈線もみられ、内面にも二条の

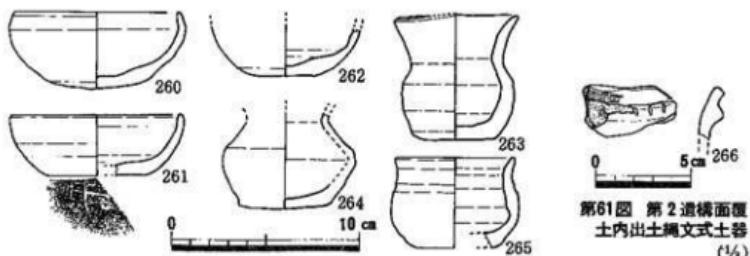
条痕がみ  
けられる。  
晩期と思  
われる。



第58図 G-1区SK-10実測図(S=1/30)



第59図  
G-1区 SK-11 実測図  
(S = 1/30)

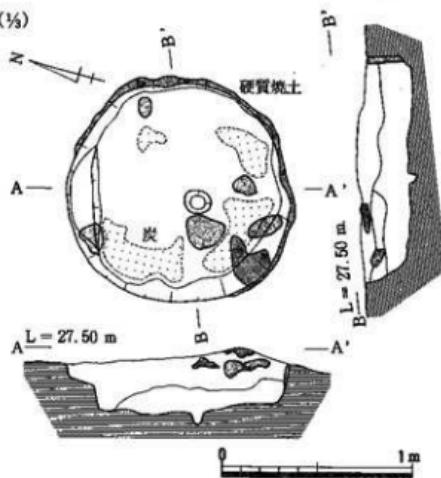


第60図  
第2遺構面上および覆土内出土須恵器 (1/3)

○第3遺構面

1区側だけに存し、F区では13層明  
茶褐色粘質土上面に、G区は地山面に  
あたる遺構面である。円形焼土壙1基  
(SK-09)、ピット25穴を検出した。  
ピットは形状、法量ともにまとまりが  
なく、建物とすることはできなかった。  
(第63図)

SK-09 (第62図)：平面プランは椭  
円形を呈している。上端径120×114cm,  
下端径100×85cm、深さは30cmを測る。  
壁面は西側を除いて、硬質の青灰色燒



第62図 F-1区 SK-09 実測図 (S = 1/30)

土がよく残っており、厚さは最大50mmを測る。F+  
床面には焼土ではなく、小ピット（上端直径12  
cm、深さ7cm）があった。土壤内の堆積土は、  
上層青灰色焼土・礫を含む褐色土、中層青灰  
色焼土・炭少量ほど含む褐色土、下層炭土の  
3層に分かれる。3層とも須恵器、土師器が  
入っており、須恵器長頸壺（第64図272）、土  
師器壺（第65図274）の一部であった。

第64図は、覆土内および遺構面上から出土  
した須恵器である。267は覆土内から出土し  
た坏で、低脚が付く。268は遺構面上にあ  
った蓋で、天井部と口縁部の境に上下の割りに  
よって突帯を表している。天井部の笠削りは  
右回りである。山本編年のⅢ期の新しい段階  
か。269～271は、遺構面上から出土した壺で  
ある。269は丸底気味で、頸部と肩部の境に  
薄い沈線が施してあり、底部は笠切り後未調  
整のままで粘土が盛り上がっている。270・271  
も切り離しは笠切りである。

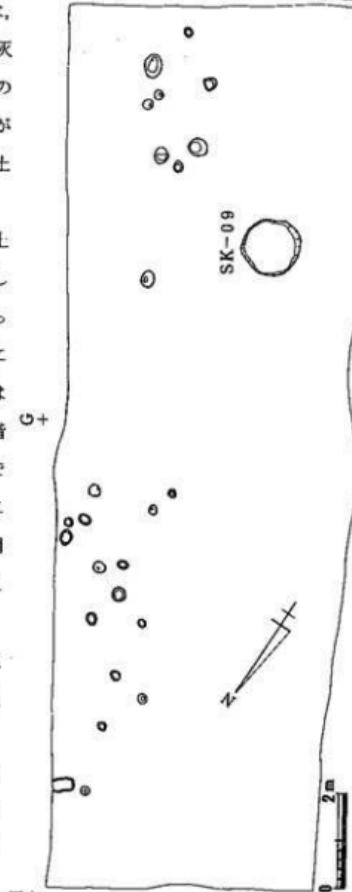
第65図273は、遺構面上にあった土師器短  
頸壺ではば完形。体部外面には指押さえの痕  
がみられる。

他に覆土内から出土したものには、第66図  
275の須恵質の土馬と、土師質の土鍤が1点  
(137頁第96図479) ある。土馬は、胸部だけ  
で性別は不明。本遺跡出土の土馬としては、  
一番小さな胸部である。

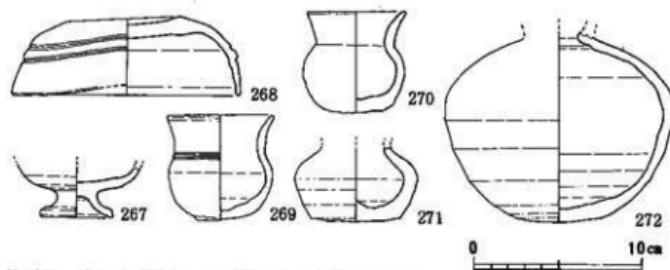
#### ○表土および堆積土層からの出土遺物

第67図は、表土および堆積土層から出土した遺物である。276は表土内から出土した寛  
永通宝（江戸時代前期）であり、遺存状態良好。277～280は須恵器である。277は高広編  
年のⅡA期の坏か。外面は笠削り後回転ナデ調整を施す。278は静止糸切り痕を残してい

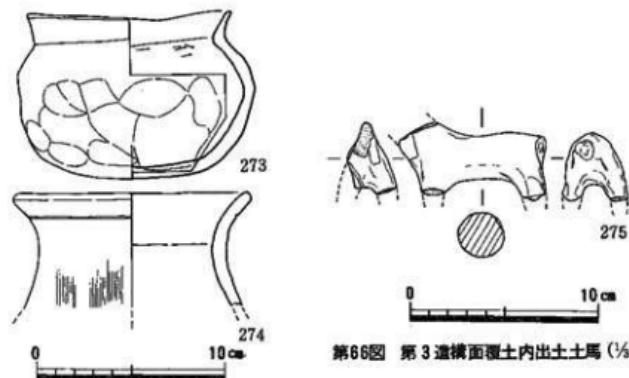
図の方に蓋



第63図 F-1-G-1区第3遺構面平面図 (S=1/120)

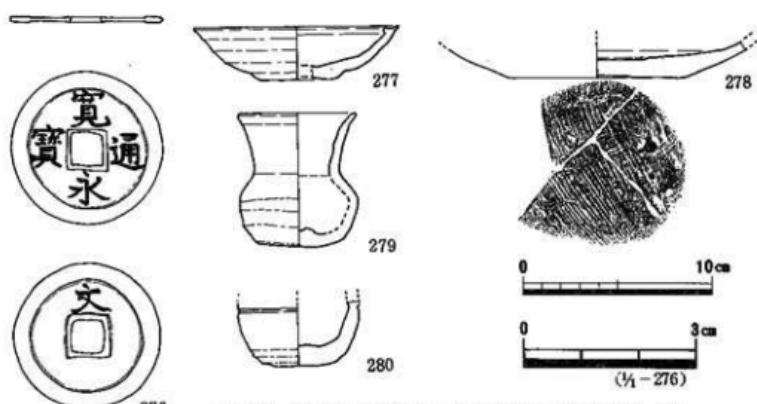


第64図 第3造構面上および覆土内出土須恵器(%)

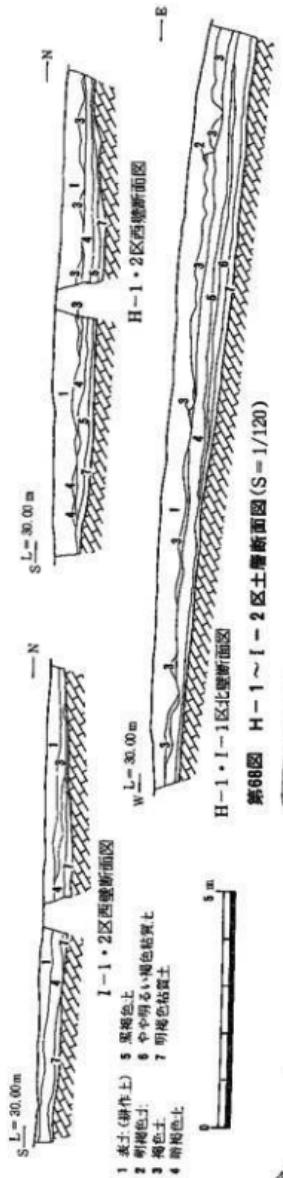


第65図 第3造構面上出土土師器(%)

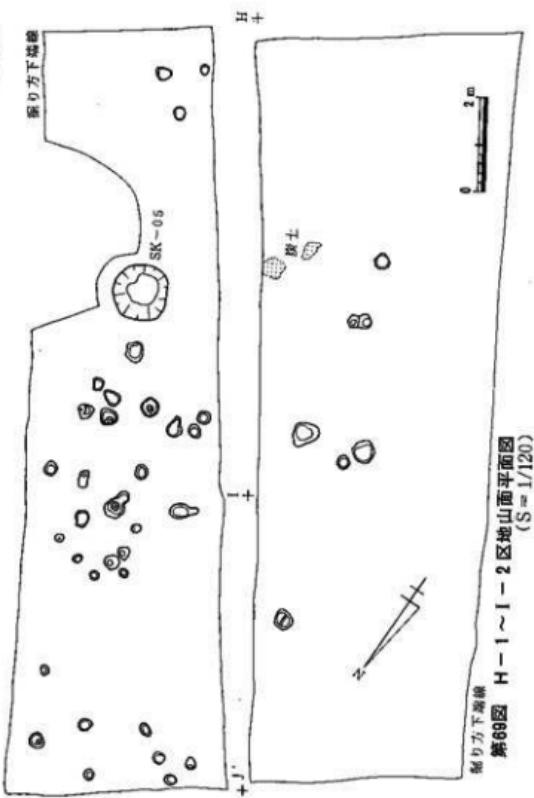
第66図 第3造構面覆土内出土土馬(%)



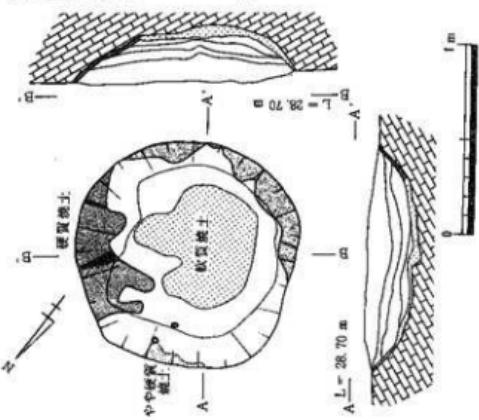
第67図 表土および堆積土層内出土古銭・須恵器(%, %)



第68図 H-1~I-2区土壁断面図 ( $S = 1/120$ )



第69図 H-1~I-2区地表面平面図 ( $S = 1/120$ )



- 118 -

る。坏かあるいは鉢か。279・280は壇である。279は範切りによる切り離し後ナデ調整を施しているが、280は未調整。

土錐も3点土師質のもの（137頁第96図476～478）が出土している。

#### 〔H-1～I-2区〕

本遺跡の西端に位置する調査区である。

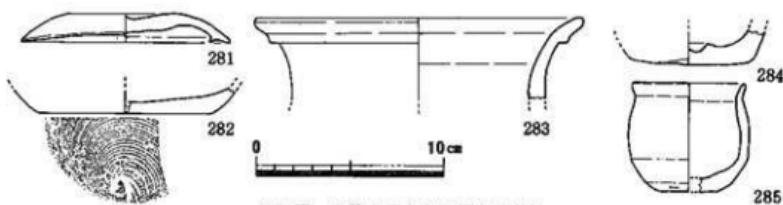
表土から最下層の地山までの間に、7層を数える。深さは谷間中央部の1・2区間柱畔のところで、0.55～1.2mを測り地山面に達する。地山は明褐色を呈しており、粘性が強い。（第68図）

調査の結果、地山面で円形焼土壇1基（SK-05）、ピット40穴、炭土2所を検出した。ピットの形状、法量は大小様々でやはりまとまりがなく、建物を組あげることができなかつた。（第69図）

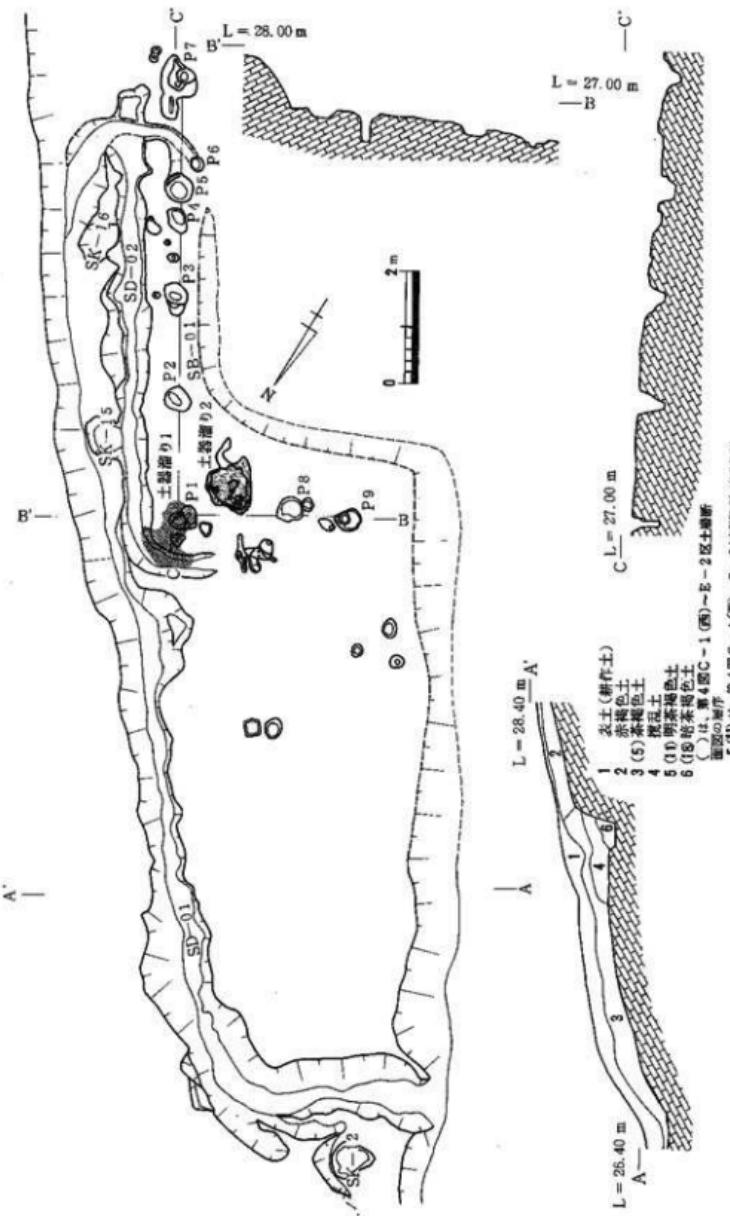
遺物は遺構面である地山面からの出土がなく、堆積土層の2層以外から出土しているが、量的にはかなり少ない。また、池ノ奥1号墳の須恵器甕片が3片、池ノ奥C遺跡の特殊土器片も2片落ち込んでいた。

SK-05（第70図）：平面プランはほぼ円形をしている。上端径125×120cm、下端径100×80cm、深さは30cmを測り、かなり大きな円形焼土壇である。壁面上部が、一部を除き非常によく焼け締まっており、その厚さは20～30mmを測る。床面は軟らかい焼土で覆われていた。土壇内の堆積土は大まかに4層に分かれ、上層炭化物粒子・小礫を含む暗褐色粘質土、中層炭化物粒子を多量に含む暗褐色粘質土、下層炭を多量に含む黒褐色粘質土、最下層直径30mm以下の炭を多量に含む炭化物層であった。土器片はなかった。

第71図は堆積土層から出土した須恵器で、土師器は出土量そのものが少なく図化できるものはなかった。281は蓋で、口縁内面にかえりが付くが、つまみの痕跡はなし。282は底外面に回転糸切り痕を残す坏。283は壺の口頭部。284は小形の壺と思われるが、腹かも知れない。285は平底の壇で、切り離しは範切り。



第71図 堆積土層内出土須恵器(%)



第72図 C-3・D-3区地山面実測図 (S = 1/100)

[C-3・D-3区]

C-2、D-2区北側の一段高いところの緩斜面に、調査の中途中で新たに設けた拡張区である。(第72図)

1層表土下10~40cmで、南側は3(5; 77~78頁第4図C-1(西)~E-2区土層断面図の層序、以下同じ)層茶褐色土に、北側ではC-3区からD-3区東北方にかけては明褐色の地山に、D-3区北西方では厚み8~30cmの2層赤褐色土を挟んで、明褐色の地山に達した。1層および2層内からは、磨滅した須恵器・土師器片が少量出土した。3(5)層の厚みは、C-2区へついでC-3区南端で最大50cmを測り、須恵器・土師器片、土質の土鏡(137頁第96図480)が出土している。4層は攪乱土で、厚さは12~30cmを測り、D-3区中央部の3(5)層下に存していた。5(11)層は明茶褐色土で、厚さは30~34cmを測り、C-3区西側の表土下に存しており、須恵器片が少量出土した。

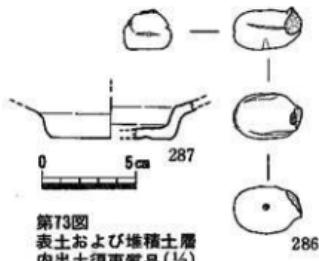
第73図286は表土内から出土した須恵質の土製品だが、一部欠けており形状不明。287は2層から出土した須恵質の灯明皿で、底外面に糸切り痕を残す。

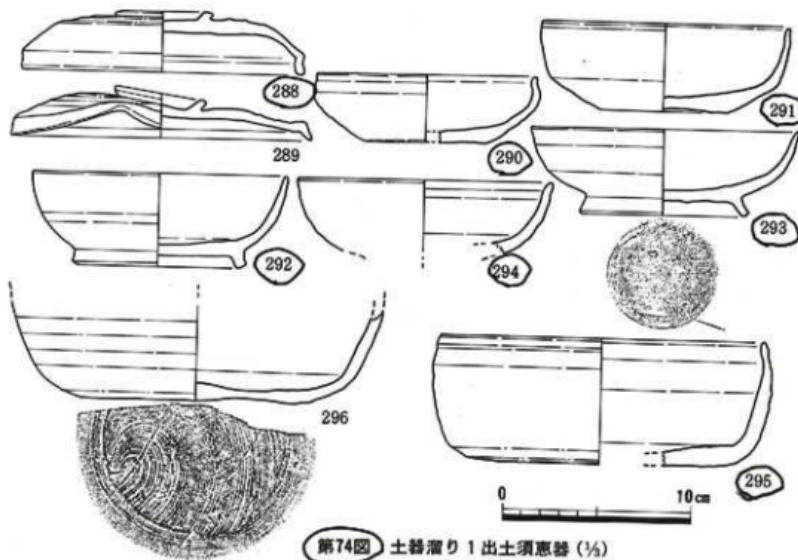
北側で検出された明褐色の地山は、3(5)層、5(11)層の北端付近で急激に落ち込み、6(18)層暗茶褐色土を伴った溝状遺構(SD-01)を形成し、3(5)層下を南へ緩やかに傾斜し、C-3区、C-2区との境付近で40~50cmの壁面を作り下っている。SD-01は、東西方向に伸びD-3区西端で南に回り込み途切れていた。SD-01上の6(18)層からは、赤色塗彩を施した土師器がよく出土している。

C-3区の地山面で、北東側に淡黄色、淡緑色を呈した粘土塊の入っていた円形土壙(SK-15・16)が付いている溝状遺構(SD-02)、須恵器および赤色塗彩を施した土師器を中心にして成り立っている土器溜り1、赤色塗彩を施した土師器が大部分を占める土器溜り2を伴った、掘立柱建物址(SB-01)を検出した。このSB-01は、南側の大半を後世の開墾で削平され失われているが、東西方向に1間、南北方向に1間の柱穴が「L」字型に残存していた。

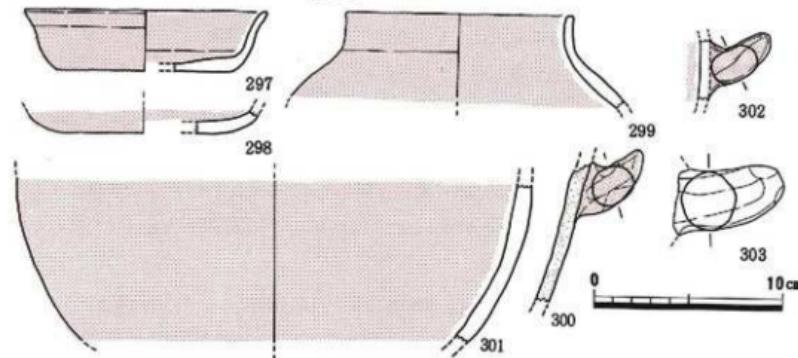
D-3区の地山面では、南に回り込んで途切れているSD-01の西外側に、円形土壙(SK-12)を確認した。

SB-01(第73・76図)：主軸方向はN35°Wで、南側は後世の開墾で削平され失われて





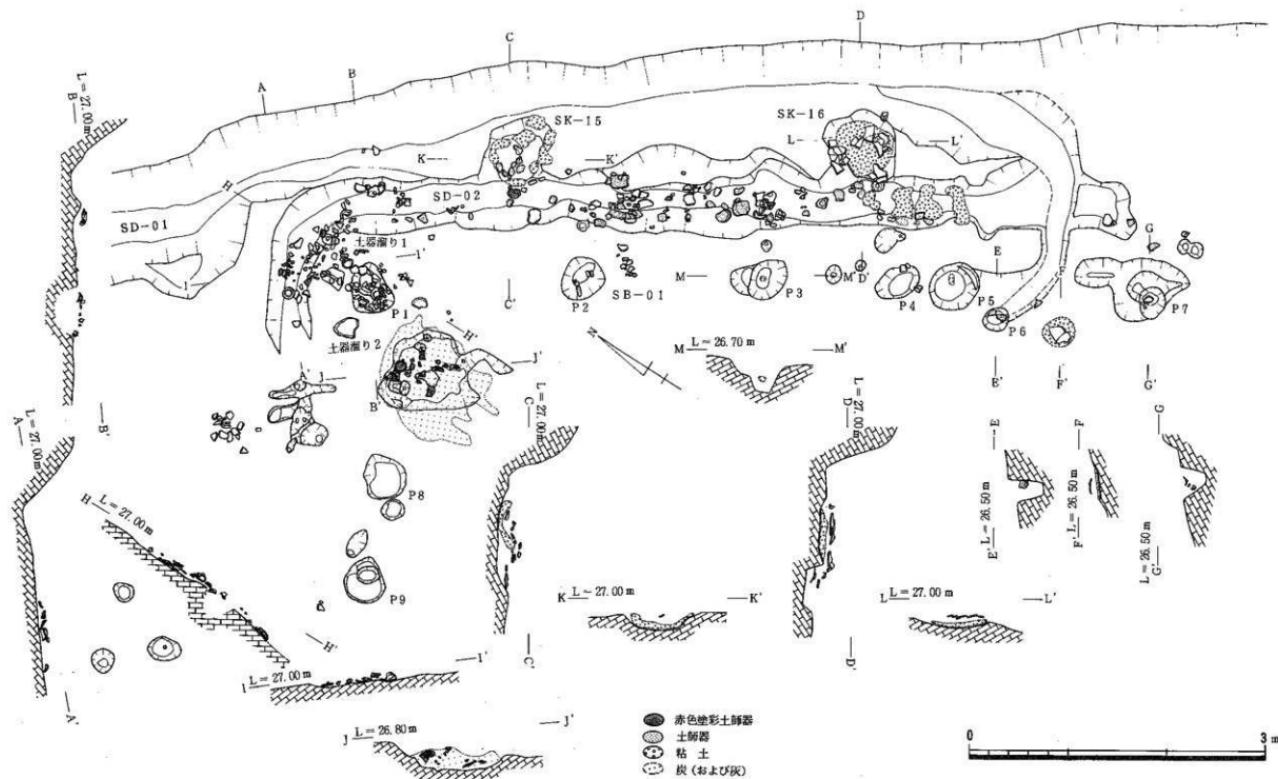
第74図 土器溝り1出土須恵器(%)



第75図 土器溝り1出土土師器(%)

いるが、東西方向に桁行4間、南北方向に梁行1間が「L」字型に残存している。柱間寸法は、桁行7.9m（西方P1から2.1+1.9+1.9+2.0m）、梁行3.0mを測る。柱穴の掘り方はほぼ円形あるいは梢円形で、P9は2段掘りで、径18cmの円孔がある。各柱穴の法量は、P1—東西径30×南北径56×深さ50cm、P2—42×44×44cm、P3—56×40×32cm、P5—52×48×32cm、P7—57×44×31cm、P9—42×48×20cmを測る。

P1上、および、そこから北側SD-02の北隅角にかけての地山面に、須恵器、赤色塗彩



第76図 C-3区SB-01, SD-02, SK-15・16実測図 (S=1/40)

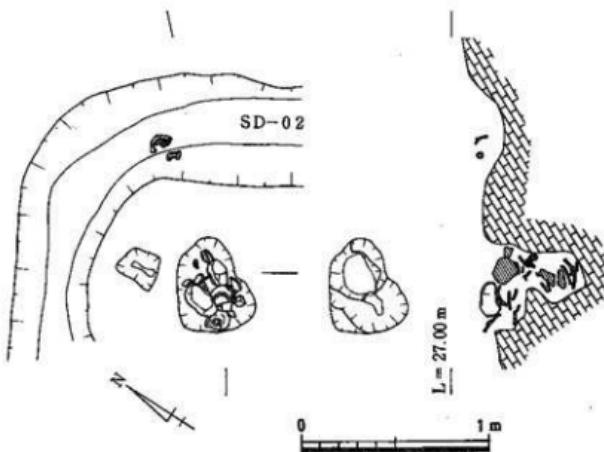
を施した土師器等から成り立っている土器溜り1が存していた。

土器溜り1からの須恵器としては、蓋・坏・高坏・鉢が出土している。第74図288・289は蓋である。輪状つまみを有し、口縁部はやや外方に開いているが短く直立するもの。289は器高が低い。高広編年のⅡB～ⅣA期。290・291は無高台の坏で、底外面に回転糸切り痕を残す。290は、体部がやや丸みを帯び口縁端部が内傾している。292・293は高台付きの坏で、293の底外面には静止糸切り痕がみられる。294は高坏の坏部、295・296は鉢である。296の底外面には、回転糸切り痕が残っている。

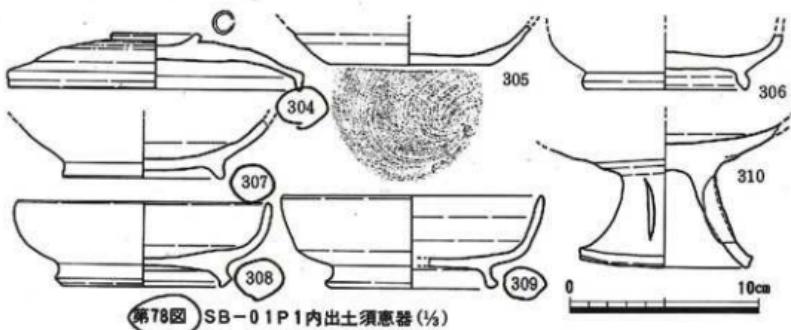
赤色塗彩を施した土師器（第75図）では、坏・把手等が出土している。303以外は全て、赤色塗彩が施されている。297・298は坏で、内外面ともに赤色塗彩。299は壺で、頭部は短く直立し、内外面ともに赤色塗彩。300・301は、接合できないが同一個体。把手付きの鍋か。把手は、先端が上方に反り返り断面は扁平。内外面ともに赤色塗彩。302も小形の把手で、先端はやや上方を向き断面は扁平。内外面ともに赤色塗彩。300・301と同一個体の可能性がある。303は普通の把手である。

土師質土錐（137頁第96図481）も、一つ含まれている。

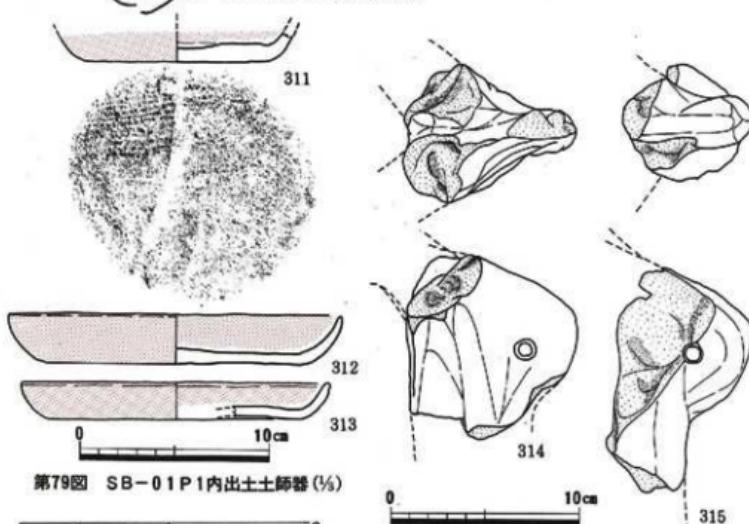
また、この土器溜り1直下のP1内にも、底まで須恵器、赤色塗彩を施した土師器が、多量に詰まっていた（第77図）。須恵器（第78図）は、蓋・坏・高坏が出土している。304は蓋で、輪状つまみを有し口縁部が短く直立するもの。天井部外面に、径1cmの竹管文が



第77図 C-3区SB-01P1内遺物出土状況実測図 (S = 1/30)



第78図 SB-01P1内出土須恵器(%)



第79図 SB-01P1内出土土師器(%)

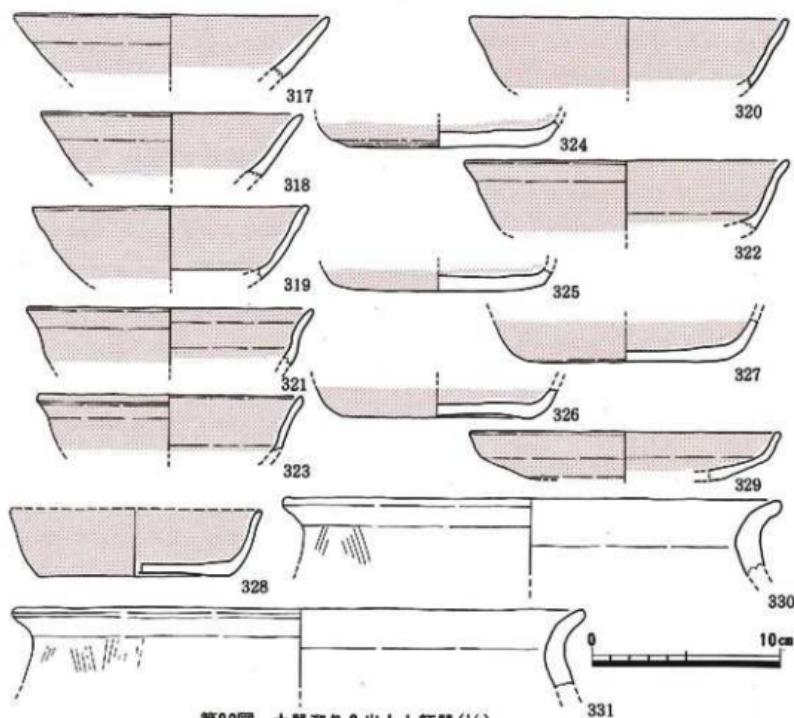


第80図 SB-01P6内出土土製支脚(%)

第81図  
SB-01P7内出土須恵器(%)

は高台付皿で、308・309の底外面には静止糸切り痕が残っている。高広編年のⅢB期か。305は無高台の杯で、静止糸切り痕を残している。306～309は皿で、312の底外面にはロクロ回転による範切りの同心円の痕がみられる。

P6内からは土師質の土製支脚（第80図314・315）、P7内からは須恵器の高台付きの皿



第82図 土器溝り2出土土師器(%)

(第81図316)が出土している。さらにP3とP5内には、SK-15・16内にあるのと同様な粘土塊が入っていた。

残存しているところはわずかしかないが、建物址内およびその近辺に焼土は認められなかった。しかし、P1とP8との間で検出した不整形土壤内に、内外面ともに赤色塗彩を施した土師器を多量に含む炭・灰土層を確認した(土器溝り2)。この不整形な土壤は、上縁で長径139cm、短径80cm、深さ11cmを測り、形状がまちまちな小ピットを6穴伴っている。炭・灰土層は、土壤全体をほぼ覆っており厚みは最大23cmもあり、一部は土壤の外まで広がっている。この土器溝り2内から出土した赤色塗彩を施した土師器の器種は、杯がほとんどで高杯もみられた。

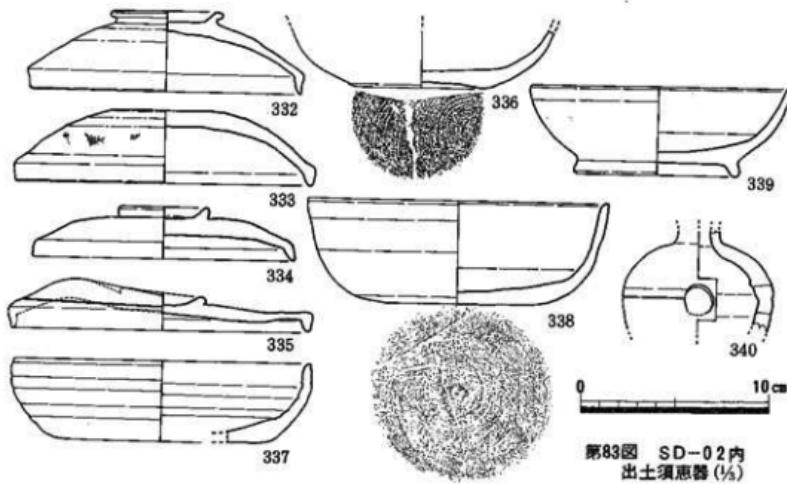
第82図317~328は杯で、内外面ともに赤色塗彩を施している。324の底部の切り離しは範切りで、何かが当たった線痕を多方向に残している。底部と体部の境目に範削りを施している。325は底外面に回転糸切り痕を残している。327も底外面に糸切り痕を残している。

329は高壺の壊部と思われ、内外面ともに赤色塗彩を施す。318の体部外面、325・328の底部外面、319の内外面には、二次焼成を受けた痕の黒斑がみうけられる。330・331は、普通の甕類の口頸部である。

SD-02(第73・76図)：SB-01北東側で検出された。上端幅は最大で86cm、下端幅16～51cm、深さ13～20cmを測る。掘り方は「U」字状を呈している。SB-01を取り囲むように巡っているが、西側では地山面が緩やかに傾斜しているなかに消えている。東側の方では、「T」字状になっており、「一」部分北側の方は地山の壁面にぶつかり、そこで途切れている。また、南側に曲がった溝は、SB-01の柱穴であるP5とP7との間をとおり、P6の方へ向かっていると思われるが、後世の開墾による削平のためにはっきりしない。この溝内からは、多量の須恵器、赤色塗彩を含む土師器および粘土塊が出土している。このSD-02は、SB-01を巡るように掘られていることから推察して、SB-01内に雨水が入らないようにした排水溝と思われる。

第83図は須恵器である。332～335は蓋で、輪状つまみを有し口縁部が短く直立するものである。333はつまみが剝離しており、つまみを付す前にいた箇状工具による線痕をみることができる。高広編年のⅡB～ⅣA期。336～339は壺で、339は高台の付くもの。336は静止糸切り痕を、337は糸切り痕を残し、338の切り離しは箇切りである。高広編年のⅡB～ⅣA期か。340は甕である。

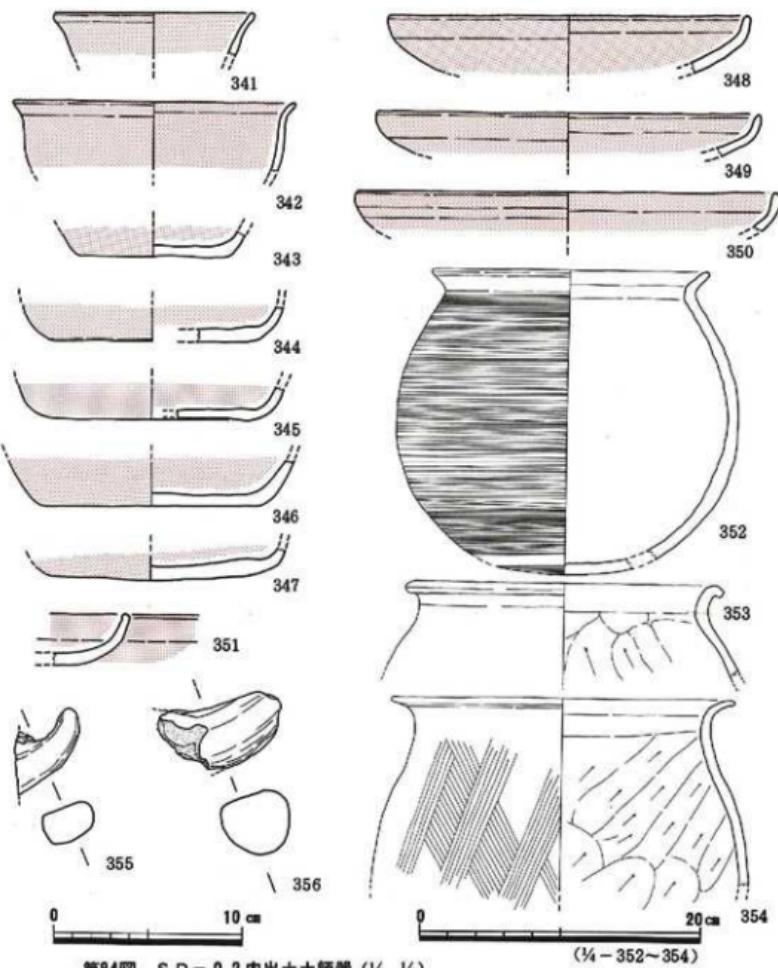
第84図は土師器である。341～351は、内外面ともに赤色塗彩を施したものである。341



第83図 SD-02内  
出土須恵器 (1/2)

~347は壺、348~351は皿類である。ほとんどのものは磨滅が著しく、調整、切り離し等不明である。342・347は同一個体の可能性がある。352~354は壺・甕類で、352の外面は櫛状工具によるカキ目調整か。354には外面に刷毛目調整がみられる。355・356は把手の部分であり、355は先端が上方に反り返り扁平な断面をしている。

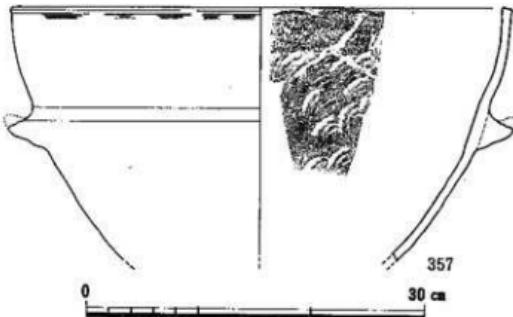
SK-15 (第76図) : SD-02に付設しているややいびつな円形土壙である。上端径64×85



第84図 SD-02 内出土土器 (1/4, 1/4)

cm、下端径42×55cm、深さ19cmを測り、SD-02とは底部が連なっている。淡黄色、淡緑色をした粘土塊が、底部の方に詰まっており、その上には須恵器、土師器片が散らばっていた。

SK-16(第76図)：SK-15と同様に、SD-02に付設しているややいびつな梢円形土壙である。上端径60×85cm、深さは中心部で7cmを測り、壁面はだらかに傾斜している。SD-02とは底部がつながっていない。内部は、ほぼ全面に淡黄色、淡緑色をした粘土塊が數き詰められており、その上には、須恵器の大きな把手付きの鍋(第85図357)と思われる土器片が散在していた。口縁部に僅かな柳状工具によるナデがみられ、端部は平坦である。焼成はかなり不良で、外面は黒褐色から黄褐色を帯び、内面は赤褐色または淡黄灰色を呈している。

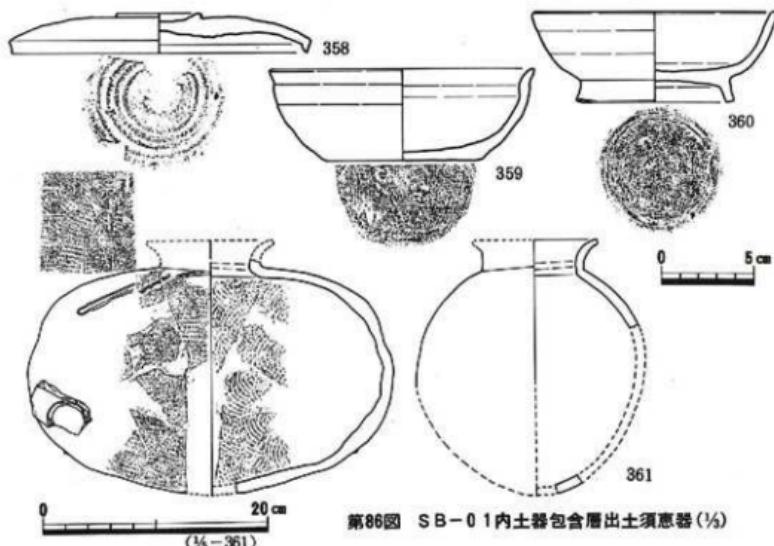


第85図 SK-16 内出土須恵器(%)

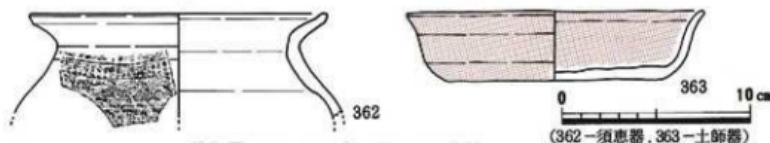
第86図は、SB-01内の土器包含層から出土した須恵器である。358は蓋で、輪状つまみを有し口縁部が短く直立するもの。天井部内面には、沈線状の左回りのカキ目がみられる。高広編年のⅣA期か。359・360は杯で、359は無高台のもので、静止糸切り痕を残し、口縁がやや直立し外傾している。360は高台付きで、静止糸切り後ナデを施している。高広編年のⅡB期か。361は横瓶で、肩部に「×」印の範記号があり、自然釉付着のためか体部外面の叩き目は不明瞭。焼き台が付いている。また、土師質(137頁第96図484)も出土している。

第87図は、SB-01床面出土の土器である。362は須恵器の壺で、肩部に平行叩き日痕がみられる。363は内外面ともに赤色塗彩を施した土師器の杯で、回転糸切り痕を残している。また、土師質の土錘(137頁第96図485)も1点出土している。

第88図は、SB-01残存部南側の後世行われた削平により、落ち込んでいる地面上の土器包含層から出土した土器である。364は須恵器の大甌である。365は土師質のもので、土馬の脚あるいは尾のようにもみえる。366・367は、内外面ともに赤色塗彩を施した土師器の杯である。また、土師質の土錘(137頁第96図486)もみられた。



第86図 SB-01内土器包含層出土須恵器(%)

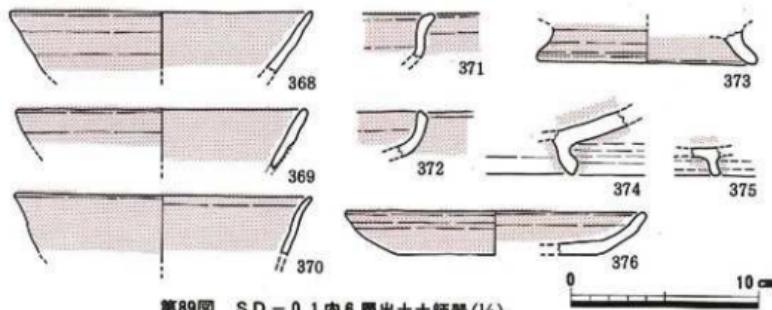


第87図 SB-01床面出土土器(%)

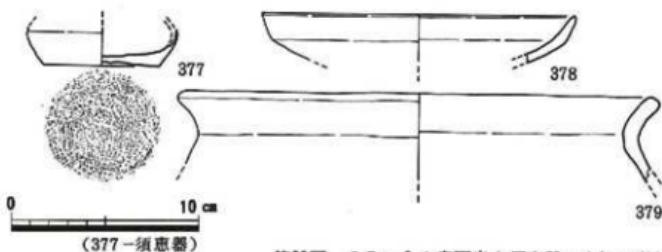


第88図  
剣平部地山上土器包含層出土須恵器・土師器(%, %)

SD-01 (第73図)：地山はSD-02北側で、高低差78～61cmの壁面を形成し一段高いテラスに連なっており、このテラスは西の方へ伸びている。SD-01は、このテラス西方の壁面直下に存している。上端幅141～51cm、下端幅58～8cm、深さは南側の上端から測り24～8cmである。掘り方は、ほぼ「U」字状を呈している。東方では、SD-02につながっている。



第89図 SD-01内6層出土土師器(%)



第90図 SD-01底面出土須恵器・土師器(%)

このSD-01内の堆積土でもある6(18)層暗茶褐色土内からは、赤色塗彩を施した土師器片がよく出土している。器種は壺が多く、皿類もみられる。第89図368~375は壺で、368~372は口縁部片、373~375は高台の部分である。376は皿である。他に土錘も土師質のものが2点(137頁第96図482・483)出土している。

また、SD-01底面からは須恵器の小形壺(第90図377)と思われるものと、土師器の壺類(378)、甕類(379)も出土している。

ところで、SD-02東端部の「T」字状の「一」部分の溝については、SD-01のつづきとみなした方が妥当と推察される。

第91図は、D-3区側の地山面から出土した須恵器である。380は壺で、静止糸切り痕を残している。381は小形の壺型土器と思われる。

[E-3区, G-3区, および, その他の出土遺物]

E-3区は, E-2区北側の斜面に調査の中途で新たに設けた幅3m, 長さ11mのトレンチで, 南北の標高差は5mを測る。この斜面の竹林の中で, 池ノ奥C遺跡を発見する手掛かりとなった, 突帯および竹苔文を施した特殊土器片を表探したことに基づいて設定したものである。

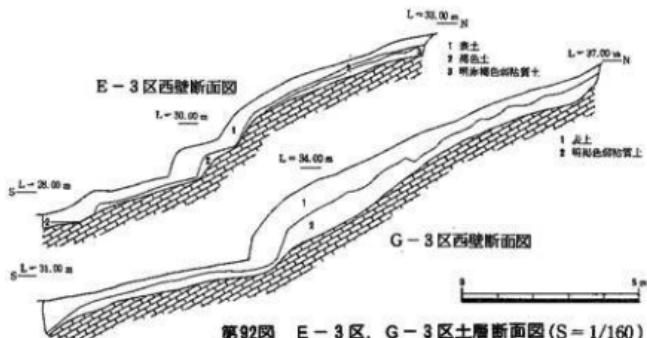
表土下0.35~1.0mで赤褐色の地山に達し, その間は三つの層に分かれた。遺構はみあたらなかった。(第92図)

遺物は, 1層, 2層から磨滅した須恵器片が極少量出土した。しかし, 池ノ奥C遺跡の特殊土器片は出土しなかった。

G-3区は, G-2区北側の石垣により一段高くなったテラス, および, そのつづきの斜面にやはり調査中途で新たに設けた幅3m, 長さ15mのトレンチで, 南北の標高差は6.7mを測る。

表土下0.4~1.6mで赤褐色の地山に達したが, 遺構は確認できなかった。(第92図)

遺物は, 1層から少量の須恵器片, および, 高台を削り出した陶器片(第93図382), 近世以降の捕鉢型陶器片(383), 2層からの須恵器片3片ぐらいしか出土していない。

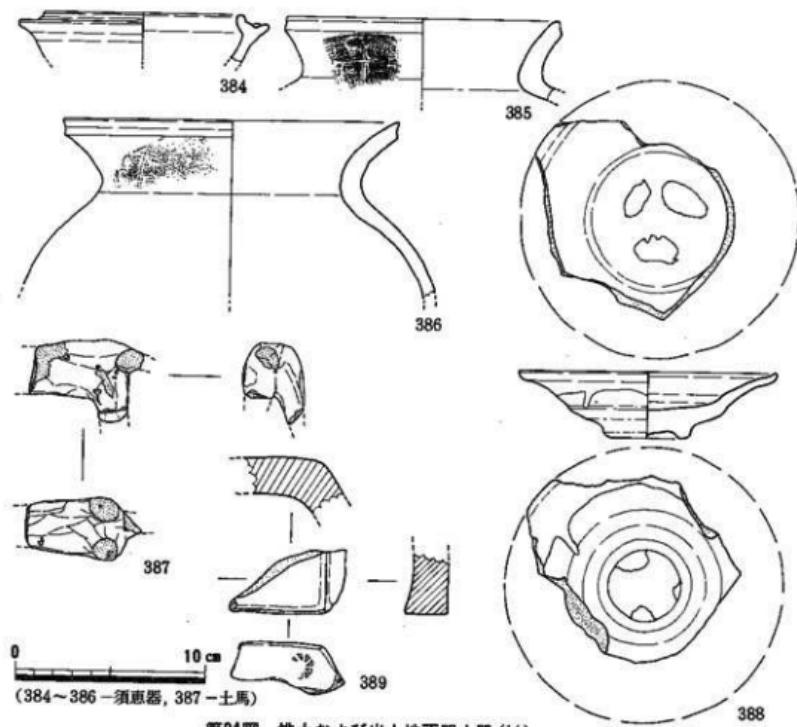


第92図 E-3区, G-3区土層断面図 (S = 1/160)



第93図 G-3区表土内出土陶器(%)

第94図は、排土内および出土地の不明な遺物である。387は須恵質の土馬で、胸部下半残存。尻部に径 $2 \times 3$  mm、深さ5 mmの肛門孔を穿いているが、性別の表現はない。



第94図 排土および出土地不明土器(%)

#### 4. 出土遺物の検討

##### 【土錘について】

本遺跡から出土した土錘の総点数は107点にのぼる(第95・96図)。胎土で分けてみると、瓦質のものが1点、須恵質2点、残りの104点が土師質のものである。出土層位をみてみると、遺構面上およびその覆土内からは、土師質のものが10点しか出土していない、排土および出土地不明の7点(土師質)を除いた残り全ての土錘は、表土ならびに上層の堆積土層内からである。

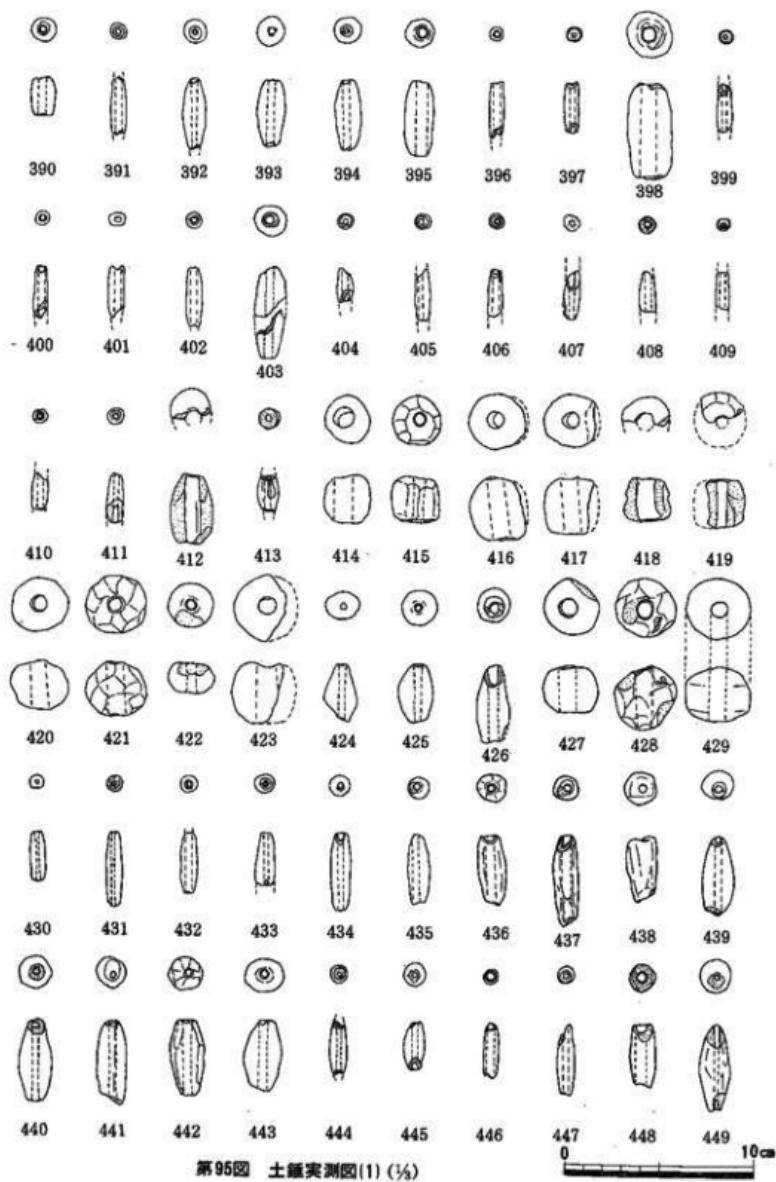
土錘の形態から便宜的に管状土錘、円筒形土錘、球形土錘、紡錘形土錘の4種類に分類

してみた。各々の出土数は、管状土錘75点（内瓦質1点）、円筒形土錘11点（内須恵質1点）、球形土錘17点（内須恵質1点）、紡錘形土錘4点で、圧倒的に管状土錘が多い。

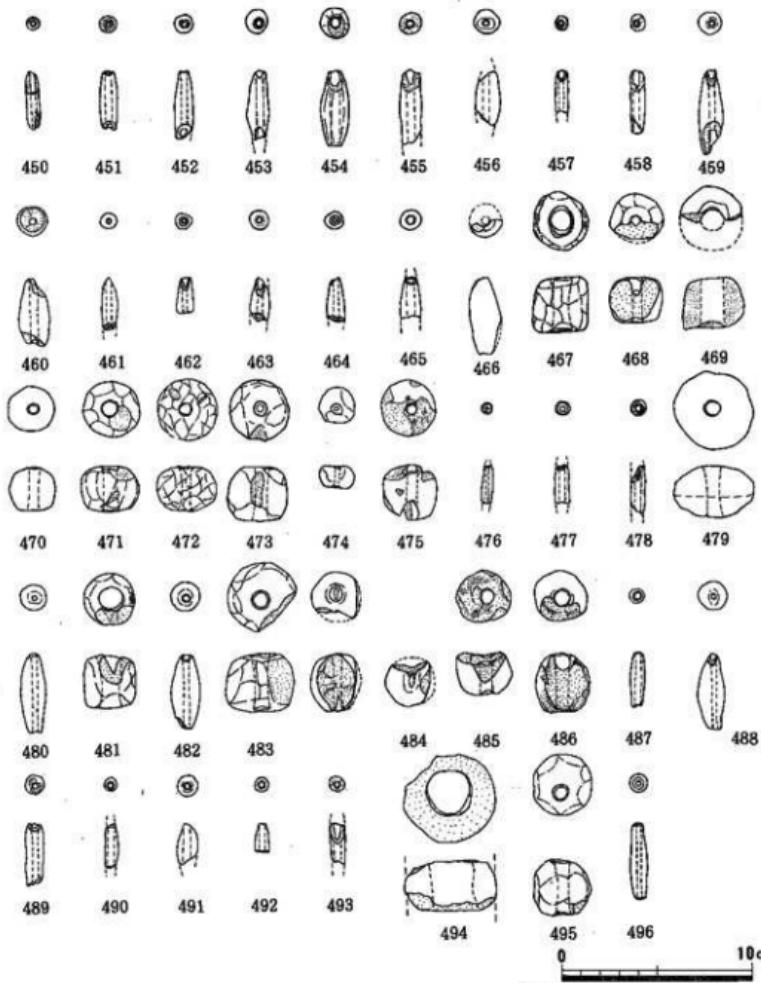
管状土錘としたものは、細長い管のような形で長軸に沿って円孔が貫通している土錘のことである。平均的なものの長さは2~5cm、径0.5~2cmで、重量は1.3~12.4gを測る。398はやや大形で、412・443のように長さに比して径が大きく太いものも含まれる。成形は棒状のものに粘土を巻き付けていると思われ、指頭による押圧痕の残るものが多い。440には、ナデ調整がみられる。円筒形土錘としたものは、管状のものより径が大きく長さと径にあまり差のない円柱状の土錘である。長さは2.3~3.3cm、径は2.4~3.0cmで、重量は11.8~26.4gを測る。成形は棒状のものに巻き付けていると思われるが、467は形を整えた後一方からの穿孔、468は二方から穿孔したものか。494は須恵質のもので、長さは不明だが径は4.85cmと大きく、本遺跡では異質な土錘である。球形土錘としたものは、球形に近い外観を呈している土錘である。大きさは2.5~3.2cm前後で、重量は11~30g程度である。成形は棒状のものに粘土を巻き付けているのと、形を整えてから二方（421・423・472?）、あるいは一方（484・495）より穿孔しているものがある。484は穿孔時の指圧によるのか片側が扁平になっている。また、475にはナデ調整を施している。紡錘形土錘としたものは、円柱状で両端の尖った土錘である。479は長さ2.7cm、径4.2cmで、重量は46.8gあり、形を整えてから二方向穿孔したものと思われる。本遺跡出土中最も重い土錘である。

以上のように本遺跡出土の土錘について形態から分類を行ってみたが、それではこの土錘の用途は何かを考えてみたい。歴史時代における土錘の用途としては、漁網錘、あるいは、祭祀関係遺物いわゆる玉類という二つの考え方がある。漁網錘の場合、現在の漁網錘と同様水中に垣根のように立つ漁網の下端に垂下したものと推定され、上端には浮子が付いていたものと思われる。また、現在漁網に盛んに使用されているのは管状土錘で、その他の形態の土錘を使用している例はあまりないようである。今使用されている例をみてみると、網の下端に土錘を付けた紐を下げているようである。重量も小型の刺網の2gのものから大きいのは1kgを超えるものまでと幅がある。<sup>其1</sup>玉類とは、古墳時代祭祀の伝統を伝える土製模造品の一つである。

ところで、出雲國風土記に「朝酌促戸渡<sup>あさくらのせとむわたり</sup>…則ち笠を東西に亘す。…大きき小き雜の魚にて、浜讃がしく、家闇ひ、市人四方より集ひ、自然に巣を成せり。〔茲より東に入り、大井浜に至るまでの間の南北二つの浜は、並びに白魚を捕り、水深し。〕」という記載がみられる。<sup>其2</sup>〔 〕の記述は、福富の浜と岩渕谷の出口にあたる浜についてのこと、白魚の漁場があったようである。この二つの浜は近世末以来埋め立てられて、今では大井新田とい



第95図 土鑿実測図(1) (%)



第96図 土器実測図(2) (1/2)

(494・495—須恵質, 496—瓦質)

う広い水田地帯になつてゐるが、当時はこの浜辺まで、イガラビ遺跡から直線距離にして、約1kmぐらゐと推察される。今でもある「矢田の渡し」付近では、笠という竹を編み川に仕掛け魚を捕つてゐたようである。しかし、この二つの浜は、水深があるようなので刺

網を仕掛けた漁をしていたのだろうか。また、同風土記には「大井浜。則ち海鼠。海松あり。又、陶器を造れり。」と記載されているが、この大井浜は、本遺跡の東側谷が開けたところを流れる大谷川の河口付近である。この浜は岩沙谷の浜より東側にあたり、やはりナマコやミルという緑色藻類等の水産物を捕っていたようである。以上のような出雲国風土記の記載内容からも推定して、管状土錘については、漁網錘と考えて差し支えないと思われる。

これに対して、球形土錘は玉類すなわち祭祀関係遺物と考えたほうがよいと思われる。それというのも、池ノ奥A遺跡からも土錘が35点出土しているが、3点ほどが円筒形土錘であとの32点は全て球形土錘であり、管状土錘は1点も出土していない。しかも、この池ノ奥A遺跡の立地条件を考えると漁網錘とは考えにくい。池ノ奥A遺跡は、標高32~45mのところにあり、浜辺に出ようすると東隣にある池ノ奥窓跡群（池ノ奥A遺跡とはほぼ同じ時期にも操業をしていたようである）を横切らなくてはならなく、漁網を持っての歩行は難しいとみうけられる。またこの遺跡は、その他の出土遺物から推定してみると祭祀に関係した遺跡の可能性が強く、さらに、土錘も管状のものが1点も出土していない、土錘のこの形態的な差が遺跡の在り方を示しているようにも思われる。

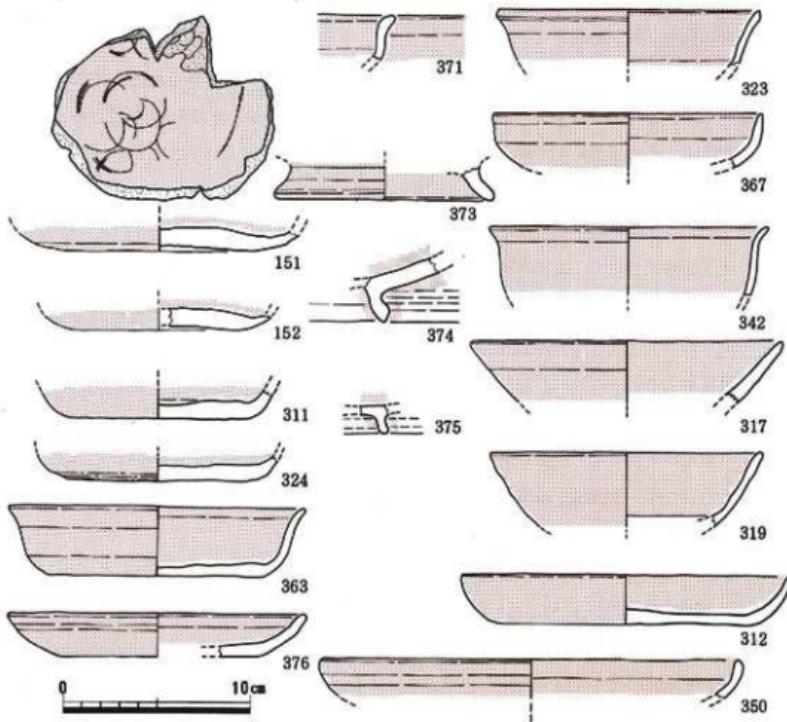
また、円筒形および紡錘形土錘については、円筒形土錘の一部は管状土錘の大形品と推察されるが、やはり大部分は玉類すなわち祭祀関係遺物であると考えられる。

#### 註

- 註1 島羽市教育委員会『島羽歴史跡』1975年
- 註2 金子裕之編『律令期祭祀遺物集成』1988年
- 註3 加藤義成『出雲国風土記研究』（松江今井書店）  
なお、〔 〕は細川家本『出雲国風土記』原文の割注。
- 註4 註3に同じ。
- 註5 本報告書第2分冊「池ノ奥A遺跡」参照。
- 註6 本報告書第2分冊「池ノ奥窓跡群」参照。

#### 【赤色塗彩土器について】

本遺跡では、多量の内外面ともに赤色塗彩を施した土器器が出土している。特に、C-3・D-3区において検出された土器器1件およびその下のSB-01の柱穴であるP1内、土器器2件、SD-02内、さらにSD-01内からよく出土している。正確な個体数ははっきりしないが、破片を数えると約1600片にもおよぶ。しかしそのうち、接合、復元を行い、図



第97図 赤色塗彩土篩器実測図(%)

化できたのは57点に過ぎない。

器種は、大半が杯・皿類(第97図)に大別でき、高杯・壺・鍋も少しみうけられる。

杯類の口径は13~15cm前後のものが多いが、最小で10cm、最大で17cmを測る。無高台のもの(151・152・311・324・363)と、高台の付くもの(373・374・375)に分かれる。口縁部の形態は、内湾するもの(367)、外反するもの(342)もみられるが、やや外反するもの(363)や、体部から口縁部にかけて外傾するもの(317・319)がほとんどである。また口縁端部を観察すると、丸みを帯びるのが大半を占めるが、外面に平坦面を形成するもの(323)、内面にやや平坦面を形成するもの(371)もみうけられる。

皿類は、口径15.5~22cm前後、器高は2~3.5cm前後のもので、体部から口縁部にかけて外傾するもの(376)と、内湾するもの(312・350)に分かれる。

暗文を施しているのは、図化できたものでは151の坏しか確認することはできなかった。底部内面に円弧文を施している。

調整についてみてみると、確認できたものは全て、口縁部から体部にかけて、内外面ともにロクロナデの手法を用いている。また、324は外面の体部と底部の境目に範削り調整を施している。底部の切り離しは、範切り後ナデ調整を施しているもの（151・152）、範切りのまま未調整のもの（324）、ロクロ回転による範切り（312）、静止糸切り痕を残すもの（311）、回転糸切り痕を残すもの（363）に分かれる。

坏・皿類について、出雲国庁跡で分類されたものと比較してみると、暗文だけを施した土器の第1型式とされるものは、1点もみあたらない。赤色塗彩を施し暗文を入れる第2型式については、1点（151）あり、他にも小破片だが極少量みられる。赤色塗彩を施し暗文を欠く第3型式に、大半のものが該当する。しかし、出土数に比して図化できたものの量は少なく、大多数の破片については磨滅が著しく判別できないものが多い。そのうえ、図化はできても、やはり磨滅が著しく調整等の観察不可能なものがかなりあった。時期については、出雲国庁跡出土例からみて概ね8世紀後半頃から末にかけての奈良時代から平安時代初頭に属するものと推定される。

坏・皿類の他に、高坏の坏部と思われるもの（127頁第82図329）、壺（89頁第21図65・122頁第75図299）も出土している。65は長頸壺の頸部で、調整はロクロナデを用い、体部との接合目に凹みがあり内面に指押さえの痕がみられる。299は短頸壺で、やはり調整はロクロナデを用いている。さらに、把手付きの鍋（122頁第75図300・301、同一個体）があるが、極めて稀有なものであろう。

歴史時代の赤色塗彩を施した土器は、周辺の池ノ奥A遺跡（破片数約50点、無高台の坏、盤）、<sup>註2</sup>池ノ奥黒跡群（土馬）からも出土している。さらに島根県内では、松江市大草町・出雲国庁跡、同福原町・芝原遺跡（無高台の坏、高台付坏、皿、蓋等）、安来市・高広遺跡（無高台の坏、高台付坏、皿）<sup>註3</sup>での出土例がみうけられる。

ところで、赤色塗彩に用いた顔料物質は、全てベンガラ（酸化第2鉄； $Fe_2O_3$ ）である。<sup>註4</sup>また、鏡鉄鉱（Specularite；206頁写真図版）という、銀色を呈した赤鉄鉱（ $2[Fe_2O_3]$ ）<sup>註5</sup>の一種である鉱物を磨滅すると赤色に発色するとのことであるが、その鉱脈が朝酌・川津地区に所在する嵩山に、僅かだが存在するようである。<sup>註6</sup>この鏡鉄鉱が、本遺跡および池ノ奥黒跡群から小さな破片であるが數十片出土している。鏡鉄鉱を採掘してきて、顔料のベンガラを作り出していたのだろうか。興味深い問題点である。

本遺跡は、赤色塗彩を施した土器と他の出土遺物とを考え合わせると、何らかの祭祀

的な性格を持ち合わせた遺跡とも推察されるが、赤色顔料の一つに成り得ると推定される鏡鉄鉢の小破片が出土していることから、ここでは祭祀に用いる赤色塗彩を施した土師器を生産していた可能性も高いのではないだろうか。

註

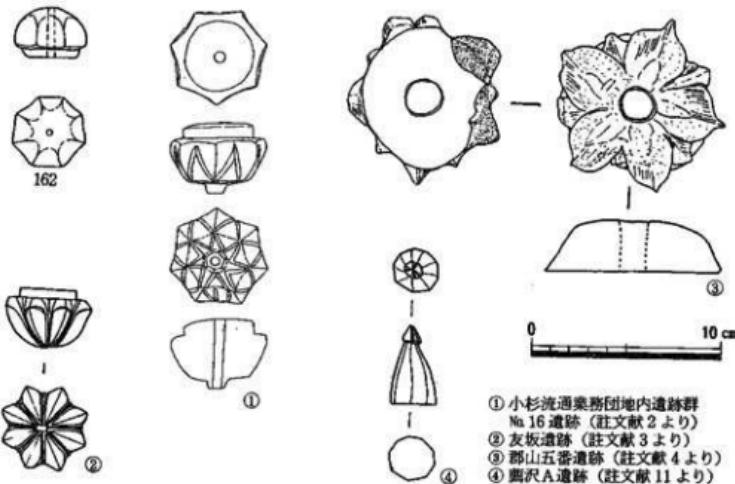
- 註1 松江市教育委員会『出雲国庁跡発掘調査概報』1970年
- 註2 本報告書第2分冊「池ノ奥A遺跡」参照。
- 註3 本報告書第2分冊「池ノ奥B遺跡群」参照。
- 註4 註1と同じ。
- 註5 松江市教育委員会『芝原遺跡』1989年
- 註6 島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』1984年
- 註7 武庫川女子大学考古学部教授 安田博幸氏、同助手 森真由美氏の分析結果による。  
本報告書第2分冊「自然科学的考察」第1節参照。
- 註8 島根大学教育学部教授 三浦清氏の御教示による。

〔小形台座型土製品について〕

小形台座型土製品とは、C-1(西)～E-2区の第1遺構面上から出土した土師質の土製品（第98図162）の仮称で、島根県内での出土は初めてのものである。しかし、やや形態的には少々異なるが類例としては、當山県で2例および福島県で1例の出土品をみると<sup>註1</sup>ができる。

富山県小杉町・大門町・小杉流通業務団地内遺跡群No.16遺跡出土品（第98図①）は、須恵質のもので7枚の蓮弁から構成されており、生焼けのためか灰白色を呈している。径5～5.2cm、高さ3.8cmを測り、上下に4～6mmの円孔を穿っている。天平～平安時代前期中葉頃のもの。同婦中町・友坂遺跡出土品（②）も、須恵質のもので8枚の蓮弁から構成されている。径3.8～4.8cm、高さは3.2cmを測る。蓮弁の縫線はくっきりと浮き彫りにされ、先端部は鋭く成形されている。長方形の孔が上下に貫通している。奈良・平安時代の作である。福島県双葉町・郡山五番遺跡の出土品（③）は、中央に上下に貫通した円孔を有し、蓮花をあしらっている。径7.7cm、高さ2.7cm、孔径1.8cmとやや大きい。中世以後の土製品のようである。No.16遺跡および郡山五番遺跡の出土品は、本遺跡出土品に比べて大きく、しかもこの3遺跡からの出土品には、蓮弁状の文様がみうけられるところに差異がある。これら的小形土製品は、土製仏像（例えば、誕生釈迦仏立像）の台座（蓮華座）とみられている。

本遺跡出土品には、蓮弁状の文様は彫り込まれていないが、塗か何かを塗ったと思われる痕があり、塗彩を施して表したとも考えられるが断定はできない。この部分だけを捉えて本遺跡出土品を、土製仏像の台座（蓮華座）とするのは早計であると思われる。なお、この土製品が出土した遺構面上の覆土内から托と円面鏡（95頁第33図109・110）が、上層の堆積土層内からは三段重ねの灯明皿（108頁第49図225）等が出土しており、何か関連があるのかも知れない。



第98図 小形台座型土製品等実測図(1/2)

ところで、本遺跡出土の土製品の形態は、一方では出雲国庁跡から出土した銅製の鍤に  
も類似している。大きさもほぼ同じぐらいであり、上面に蓮弁状の文様を入れ上部中央に  
紐と環を付け、円孔がないのが相似点である。この銅器は、重さが157.77gあり、度量衡  
の管理もしていたとされている役所からの出土品であるため、分銅ではないかとみられて  
いる。<sup>註6</sup> 同様の銅製品は、静岡県袋井市・坂尻遺跡や同藤枝市・山廻遺跡からも出土してお  
り、分銅と推定されている。しかし、土製品で分銅と推測されるものの例はない模様であ  
る。律令制度以降の分銅は、現段階では金属製品が使用されていたとみられているが、重  
量が乾湿により少々変化する土製品は不向きなのだろうか。しかし、厳密に重さを測って  
いたかどうかは判らないし、出土したのが役所跡ではないところなので、概ね重さが揃め  
ればよいとして用いたとも考えられないだろうか。因に本遺跡出土品の重量は、晴れた日

で36.45 g を測った（平成元年7月7日測定）。

また、近くの薦沢A遺跡からも須恵質の9角錐（④）が出土している。丁寧な作りでそれぞれの面は滑らかである。上段は4角錐を呈し切り込みがあり紐を掛けることができそうである。重さは、8.5 g を測る。この9角錐の用途もはっきりしないが、分銅の可能性も考えられないだろうか。

以上のように、本遺跡出土の小形台座型土製品（仮称）について、その用途を類似品から考察したみたが、現段階では不明であると言わざるを得ない。今後資料が増加した時点で明確になるのではないだろうか。

#### 註

- 註1 島根県教育委員会文化課主事 内田律雄氏の御教示による。
- 註2 富山県教育委員会『小杉流通業務団地内遺跡群－第6次緊急発掘調査概要』1984年
- 註3 磯中町教育委員会『友坂遺跡調査報告書』1984年
- 註4 福島県双葉町教育委員会『郡山五番遺跡』1980年
- 註5 石見国分寺跡から昭和63年度の調査で、7世紀後半白鳳時代の銅造誕生釈迦仏立像が出土している。「石見国分寺跡出土銅造誕生釈迦仏立像について」（島根県文化財愛護協会誌『季刊文化財』64号 1989年）
- 註6 松江市教育委員会『出雲国庁跡発掘調査概報』1970年
- 註7 宮本佐知子「古代の度量衡」（町田草編『古代史復元8 『古代の宮殿と寺院』講談社 1989年）
- 註8 財団法人大阪市文化財協会 宮本佐知子氏の御教示による。袋井市教育委員会『推定遠江國佐野郡衙跡板尻遺跡』
- 註9 註8に同じ。藤枝市教育委員会『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書』奈良時代～近世編 1981年
- 註10 松江市竹矢町・才ノ崎遺跡から出土した石製品の中に1点分銅ではないかと推定されるものがある。島根県教育委員会「才ノ崎遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV』1983年
- 註11 松江市教育委員会『薦沢A遺跡・薦沢B遺跡・別所遺跡』1988年

#### 5. 小 結

調査の結果、本遺跡では地山面を含め三つの造構面を確認し、溝状造構（SD-02）を伴う掘立柱建物址1棟（SB-01）、円形焼土壙11基、建物址を復元するまでには至らなかつたが多数のピット、円形土壙5基等を検出した。また、土器も須恵器、土師器の他繩文式土器（後期・晚期）、中世の陶器（龜山焼系統他）、中国産（？）の白磁片、近世以降の陶器等と出土している。しかし、中心となるものは須恵器と土師器で、全出土量に占める割

合は須恵器が一番多く約2/3近くを占めている。須恵器の形態および赤色塗彩を施した土師器から推察して、本遺跡の営まれていた中心的な時期は、概ね7世紀中頃から9世紀初頭にかけての期間で、特にSB-01の時期は8世紀代と思われる。

SB-01等が検出されたC-3・D-3区などの拡張区以外の本遺跡は谷底に位置しており、各遺構面およびその覆土内には石、礫が多量に混じっていたので、自然災害に遭った可能性が強いと思われる。しかも、災害に見舞われてもその後場所を替えず元のところで営みを続けていたものと考えられる。なお、上部の遺構に比べて下の遺構面およびその覆土内の遺物は、出土量が少なくなっていく傾向がみられた。

また、上層の堆積上層からの出土遺物は、池ノ奥C遺跡の特殊土器片および池ノ奥1号墳の須恵器壺片を伴っているので、その他の器種のものも例えば杯とか壺についても、全て本遺跡での営みによる遺物とみることはできないように思われる。

つぎに、本遺跡の性格について考えてみたいと思う。まず、遺構面から考察してみると、掘立柱建物址（SB-01）および建物址に復元するまでには至らなかったがピット群の存在から、ここに小さな集落があった可能性が強い。そして、SB-01に付帯するSD-02やSK-15・16等には粘土塊が残っていたが、イガラビ、池ノ奥周辺で現在みることができる粘土は、土師器の胎土として申し分ないようである。<sup>註1</sup>さらに、赤色顔料であるベンガラの原料に成り得るとみられる鏡鉄鉱（Specularite）が、本遺跡内から出土していることと考え合わせると、土師器の出土量が須恵器に比してかなり少ないが、ここでは赤色塗彩を施した土師器の杯類、鍋やその他の壺、壺等を生産していた工房址があったのではとも考えられる。しかも、それを裏付けるかのような壁面は焼け締まっているが、床面はあまり焼けていない円形焼土壇を検出している。この円形焼土壇の用途は、やや大き過ぎるかも知れないが竈を据付た炉の跡とも推察されるが、土師器焼成窯の可能性もあると考えられる。<sup>註2</sup>また、出土遺物をみてみると、土師質の管状土錘がかなりあることや、出雲國風土記の大井地区に関する記載から、ここに生活拠点を持っていた人々は、浜辺からは少し離れてはいるが漁業にも関わりを持っていたのではと推定される。

本遺跡から出土した遺物には、この他にも幾つかの特徴を持つものがみられる。

- ◎土馬5個体以上（A～F区）
- ◎ミニチュア土製支脚（須恵質）1点（B-1区）
- ◎小形杯（土師質）1点（B-1区）
- ◎球形・円筒形・紡錘形土壺（土師質・須恵質）32点
- ◎円面鏡1～2?点（D-2区、C-1区）

◎托1点 (D-2区)

◎灯明皿2点 (C-2・D-1区間内, C-3区)

以上の何らかの祭祀に用いられたものではと推察されるものである。土馬については、祈雨、祈止雨等の水盤信仰との関わり、あるいは、荒ぶる神に対する生贋の馬の形代として神に捧げられたもの。また、災いや病をもたらす疫病神から免れるため、その乗り物である馬（上馬）の脚を折ってその動きを封じるものといった説がある。本遺跡では、自然災害、荒ぶる神への捧げ物であったのだろうか。

さらに、須恵器の堆が31個体以上（特にF-I区に集中して出土）、横瓶8個体以上（A～E区およびC-3区）と他の遺跡に比べて多く出土しているが、これらも祭祀に関わりを持っていたのだろうか。

上記のことから、本遺跡についてまとめてみると、つぎのようになる。

① 小さな集落跡。

◎須恵器の出土量が多く、北隣の谷筋に所在する池ノ奥窓跡群<sup>E4</sup>（窓本体は確認できなかったが、本遺跡とほぼ同時期頃と思われる須恵器もよく出土している）を開いた工人集団と密接な繋がりを持っていたのか。例えば生活拠点の一つか。

◎土師器、特に赤色塗彩を施した土師器の制作をしていた工房跡か。

◎漁業にも携わっていたのか。

② 祭祀に関わりを持つ遺跡。

◎集落に付帯する祭祀を執り行っていたのか。

◎住居内で祭りが行われていた可能性がある。例えば地鎮祭等か（SB-01内の土器  
溜り2はその跡か）。

◎土馬を用いた祭祀を執り行っていたと思われる。

何れにしても、本遺跡だけをみて論することは全体を見誤る可能性があり、イガラビ、池ノ奥両地区の各遺跡との相互関係を見極めて検討しなければならないだろう。特に池ノ奥A遺跡<sup>E5</sup>の祭祀に関わりを持つ遺物との共通点あるいは相違点については、本遺跡を考えるうえで重要なことであると思われる。

また、今まで朝酌・大井地区では、縄文、弥生時代の遺跡が見つかっていないかったが、本遺跡から後期、晩期の縄文式土器片が6個体分出土した。このことにより、朝酌・大井地区での人の営みが始まった時期が、一気に縄文時代にまで遡れることは注目されよう。今後の資料増加に期待するものである。

註

- 註1 烏根大学教育学部教授 三浦清氏の御教示による。
- 註2 財団法人滋賀県文化財保護協会 近藤道、松沢修両氏の御教示による。滋賀県内に、時期は下るが黒色土師器を焼成した円形焼土壙の検出例があるようである。
- 註3 加藤義成『出雲国風土記参究』(松江今井書店)
- 註4 本報告書第2分冊「池ノ奥窓跡群」参照。
- 註5 本報告書第2分冊「池ノ奥A遺跡」参照。

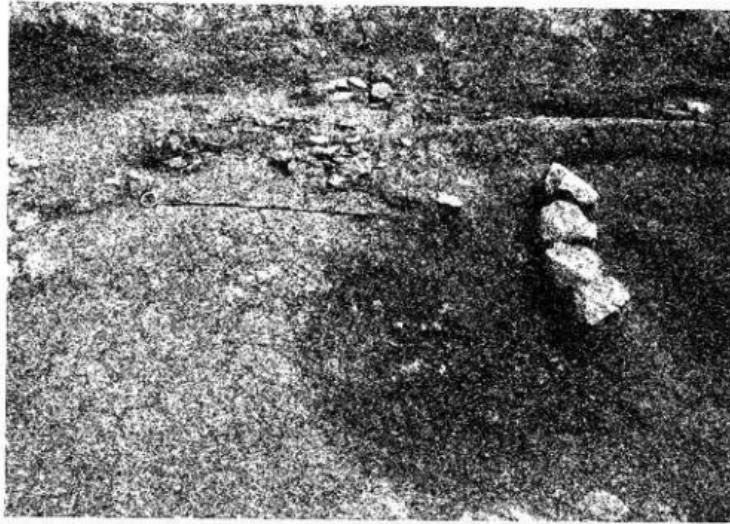


写真1 C-3区土器溜り1(上)・土器溜り2(下)

## 附編

### 池ノ奥窯跡群4号窯附近に見られる金属様 破片について

鳥根大学教育学部 三浦 清

光沢ある黒色(Steel Gray)の見掛け上金属様破片である。筆者のもとで調べたものは二点で、両者は発見場所が異っている。各試料の発見された層準は以下のとおりである。

(1) : 窯跡4号A-1区第4層遺物包含層

(2) : 窯跡4号A-W区8層

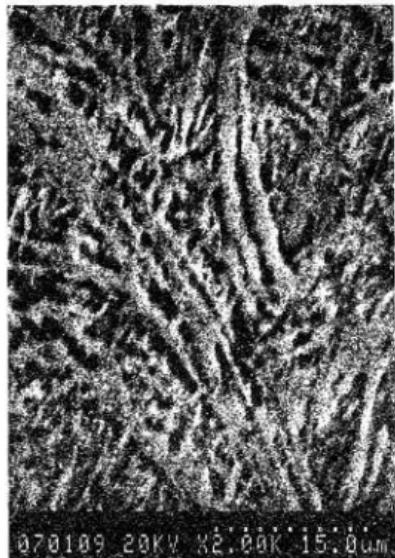
両試料ともに自形結晶片で、特に(2)の試料は新鮮でやや大きく長径7ミリメートル程度の薄片状をなす。この試料の表面の電顕写真を示しておくが、恐らく天然の鉄物結晶であろうと思われる。

両試料の分析値は表に示すとおりで、特に(2)の試料は新鮮な赤鉄鉱であり、(1)の試料はやや変質しているように見える。

この種の金属光沢を示す赤鉄鉱(Hematite)を特にSpeculariteと呼んでいる。

両者ともに、條痕色は赤茶色を示す。従って細粉になると赤茶色のベンガラになる。

池ノ奥窯跡群4号窯附近に見られる  
金属様破片の分析値



試料 成分	(1)	(2)
Si	0.33 (Wt %)	0.13 (Wt %)
Ti	0.01	0.62
Al	0.60	0.33
Fe	69.46	67.35
Mn	0.19	0.40
Mg	0.30	0.53
P	0.15	0.10
S	0.11	0.04
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 換算値	99.31	96.42

(1) : 窯跡4号A-1区第4層遺物包含層

(2) : 窯跡4号A-W区8層

# 出土遺物観察表

縦文式土器

番号	形態	特徴	縫合	七色	出土地点
1	表 鏽滑		1mmまでの砂粒合	淡緑灰色	A-2・B-2間壁8層
2			2mmまでの砂粒合	黒褐色	" "
33 深鉢	表 太い沈縁、条痕		"	淡黄褐色～黒褐色	A-2 II層
79	表 二条の沈縁		"	黒褐色	B-1 6層
80	表 沈縁		4mmまでの砂粒合	"	" "
266	表 瓦舟形斜文有 二条の沈縁	表 二条の条痕	3mmまでの砂粒合	表灰褐色、黒褐色	G-1 8層

須恵器

番号	形態	口径cm	器高cm	形態・手法の特徴	その他の	出土地点
4	环 盖	11.0	4.06	壓切り	④捺記号	B-1 8層
5	"	16.4	3.5	輪状つまみ・かえり、④捺削り+回転ナデ	④捺記号、重ね焼き痕	A-2 10層上面
6	蓋	23.1		④回転ナデ	大形品	B-2 8層
7	坏 身	10.0	3.0	捺切り後ナデ、④回転ナデ	④自然釉剥離	B-1 "
8	"	9.8	3.55	捺切り、④捺削り+回転ナデ	④捺記号	" "
9	低脚付坏	18.0	3.8	④回転ナデ	低脚部	" "
10	高 坏	14.4	8.2	台形透し(一所)、切り込み(一所)		" "
11	"	15.25	8.11	三角形透し・切り込み(二方向)		" "
12	高台付盖	18.0	8.3	静止糸切り、④洞紅鉛削り後回転ナデ		B-2 "
13	增	9.0	7.8	糸切り、回転ナデ	自然釉付蓋	B-1 "
14	蓋	44.8	18.2	光擦・波状文、回転ナデ	口頭部	C-1 (東) 10層上面
15	"	21.0	12.8	口頭部回転ナデ、網目④平行叩き後カキ目	④自然釉付蓋	B-1 8層
16	横 瓶	12.6		口頭部回転ナデ	口頭部	" "
17	"			④平行叩き後カキ目、光擦痕有	④自然釉付蓋	" "
23	坏 身	8.2	8.15	1.5回転ナデ	重ね焼き痕、④自然釉剥離	A-1 10層
24	高 坏		12.45	台形透し・切り込み(二方向)+沈線		B-1 "
25	"		9.2	二段切り込み(二方向)+沈縁、回転ナデ		地山面P内
26	蓋		3.5	捺切り後静止ナデ、回転ナデ		" "
27	長 瓶 盖		15.7	捺切り後ナデ、④捺削り+回転ナデ・カキ目有	自然釉付蓋	A-1 10層
28	瓶			突唇端貼り付?、回転ナデ		" "
30	坏 身			④沈縁有		B-2 11層
31	"	11.1	3.2	糸切り、回転ナデ		" "
34	坏 盖	13.2	3.2	輪状つまみ・かえり、捺切り、④回転ナデ	重ね焼き痕	A-1 7層
35	"			輪状つまみ、④捺削り+回転ナデ	④竹管文2有	B-1 "
36	"	12.4	2.45	宝珠状つまみ・かえり、④捺削り+回転ナデ	光形、重ね焼き痕	B-2 3層
37	坏 身	9.8	2.85	捺切り、④捺削り+回転ナデ	④捺記号、重ね焼き痕	" "
38	"	10.2	2.5	回転ナデ	重ね焼き痕	A-1 7層
39	"	9.4	1.7	"		" "
40	"	6.3	2.25	"	小形品、磨滅	" "

## 須 惠 器

番号	形 態	口径cm	高さcm	形態・手法の特徴	そ の 他	出 土 地 点
41	坏 身		鷹 3.0	直切り。回転ナデ	④鶴記号。⑤粘土貼り付	A-1 7層
42	低脚付坏		鷹 2.8	三角形透し(4面?)	低脚部	B-2 6層
43	"		鷹 3.2	④回転ナデ(底・体部邊目割り)	"	A-1 7層
44	高台付坏	15.4	6.4	回転ナデ		B-1 6層
45	高 坏		鷹 2.5	低脚窓。台形透し		A-1 4層
46	"	15.2	9.9	切り込み(一所)	脚部切り込み部分鶴記号	" 7層
47	"		鷹 8.7	" (二方向)	竹青文2所。重ね焼き痕	" "
48	罐			沈線+波状文。回転ナデ	口縁部	B-2 6層
49	"		鷹 8.6	直切り。④直削り+回転ナデ・沈線	自然輪付着	B-1 7層
50	把 手				裏の把手	B-2 3層
51	小 形 盆		鷹 3.1	糸切り?。回転ナデ	④鶴記号	B-1 "
52	"			回転糸切り。回転ナデ	"	A-2 7層
53	壺			直切り後ナデ。④直削り、④回転ナデ	" ④自然輪付着	A-1 "
54	"		鷹 3.9	回転糸切り。回転ナデ	底部④傷痕	A-2 6層
55	"		鷹 6.6	回転ナデ。④平行印き目有。④指痕压痕有		B-2 8層上面
56	鉢	24.0	鷹 6.5	"		" 7層
57	瓶又は壺				④自然輪剥離	B-1 3層
58	"			口縁部回転ナデ		" "
59	壺	25.0	22.5	把手付。④沈線有。円孔一所に2穴		B-2 7層
60	土製文具		3.2	ミニチュア品。三叉突起。ナデ		B-1 3層
61	壺	16.1	鷹 5.6	口縁部回転ナデ	頸部④押当て具の木口底有	B-2 "
62	"	19.4	鷹 33.4	口縁焼凹み有。回転ナデ		" 7層
63	"	26.0	鷹 24.7	口縁部回転ナデ	④自然輪剥離	A-2 "
66	坏 壺	13.3	3.3	輪状つまみ・細かいえり。④直削り+回転ナデ		D-2 12層下部
67	"	14.0	3.1	輪状つまみ。糸切り。④回転削り+回転ナデ		" "
68	"	14.8	2.7	* 回転ナデ		" "
69	坏 身	8.6	2.85	直切り。④直削り+回転ナデ。④回転ナデ	④自然輪付着。受壓ややくびつ	C-1 (西) 12層下部
70	"	10.3	2.85	直切り後亂ナデ。④回転ナデ	ほぼ完形	" "
71	"	10.6	4.15	直切り後ナデ。④回転ナデ		" "
72	"	10.8 ~11.5	4.1	④回転削り+④直削り	口縁部焼凹形	E-2 15層下部
73	"	12.0 ~13.5	5.0	静止糸切り後ナデ。④回転ナデ	" 重ね焼き痕	D-2 12層 "
94	高台付坏	14.2	4.1	④回転ナデ		E-2 15層 "
95	"	12.6	4.5	糸切り。④回転ナデ	④鶴記号	D-2 12層 "
96	高 坏	17.6	12.5	台形透し・切り込み(二方向)+焼跡		C-1 (西) 12層下部
97	"		鷹 5.6	脚部回転ナデ。坏底部④回転削り	坏部欠損	D-2 "
98	鉢	10.0	10.1	ヨック型。台座側面削り。円孔4所有。	完形	C-1 (西) "
99	長 頭 壺		鷹 14.7	底部④回転削り。体部④直削り+回転ナデ	④自然輪付着	" "
100	"		鷹 7.1	脚部④カキ目。堆回転ナデ	" "	C-2 "
101	高台付壺		鷹 8.0	直切り後ナデ。回転ナデ	④ (底部)	C-1 (西) "
102	罐		鷹 7.2	体部下部④削り。物回転ナデ	④ "	D-2 "
103	壺		鷹 24.85	頸部沈線+波状文・回転ナデ	" "	C-1 (西) "
104	"	40.0	鷹 18.7	沈線+波状文・回転ナデ	" 口縁部	D-2 "

## 須 恵 器

番号	形態	口径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	その他の記号	出土地点
105	壺		約35.2	胴部と底部別々に形成。④平行叩き後カキ目		C-1 (西) 12層下部
106	把手			先端部切れ込み有。挿入式		D-2
107	瓶又は罐		約9.3	④平行叩き、口縁端部回転ナデ、袖ナデ	口縁部	C-1 (西) × ×
108	横 瓶	14.0	27.0	体部側面円形粘土板で蓋をしている	肩部施記号	D-2 × ×
109	托		約1.25	端切り		× 16層
110	円 面 瓶	14.9	2.8	静止糸切り	使用痕跡なし	× ×
111	环 瓶	16.6	3.0	輪状つまみ。かえり、端切り後ナデ ④削削り+回転ナデ		× 17層上面
112	“	18.0	2.9	輪状つまみ。かえり、回転端切り後ナデ ④回転削削り+回転ナデ		C-2 ×
113	“	16.4	2.65	袖伏つまみ。かえり	④自然輪削離	D-2 ×
114	“	14.8	3.4	袖伏つまみ。④端削り+回転ナデ		× ×
115	“	14.6	1.65	“		× ×
116	“	14.6	2.3	袖伏つまみ。静止糸切り後ナデ ④削削り+回転ナデ	完形	C-2 ×
117	蓋			袖伏つまみ剥離。火井部内外面カキ日有	大型品、中心に円孔有	D-1 ×
118	环 蓋	14.2	2.7	袖伏つまみ。静止糸切り。④回転ナデ	輪状つまみの口径大	C-2 ×
119	蓋	19.3	3.5	宝珠状つまみ。かえり。④削削り+回転ナデ	重ね焼き痕、④施痕有	D-2 ×
120	环 蓋			乳頭状つまみ。④回転ナデ		D-1 ×
121	环 身	10.5	3.8	端切り後ナデ	ほぼ完形	× ×
122	“			“	④施記号、④スノコ痕有	C-2-D-2開咲 17層上面
123	“	8.7	3.15	糸切り後ナデ、回転ナデ	小鉢型	C-2 17層上面
124	“	13.0	5.6	静止糸切り。④回転ナデ	重ね焼き痕	× ×
125	“	12.8 ~13.6	4.65	“	口縁部椎円形、重ね焼き痕	E-1 ×
126	“	12.6	3.9	糸切り押捏痕。④削削り+回転ナデ	④沈線有、④施成後の施痕有	D-2 ×
127	高台付环	13.6	5.1	④回転削削り+回転ナデ	④施記号	C-2 ×
128	“	11.8	5.3	④施削り後ミズヒキ	④自然輪付着	E-1 ×
129	“			端切り後ナデ、④回転ナデ	④施記号	D-2 ×
130	“	10.0	3.85	“	自然輪付着	× ×
131	“	10.4	4.2	“	④回転ナデ	C-2 ×
132	“	16.7	3.9	“		C-2-D-2開咲 17層上面
133	“	14.0	5.05	静止糸切り後ナデ。④回転ナデ		C-2 17層上面
134	“	12.6	約3.7	“	④施削り+回転ナデ	× ×
135	“	13.6	5.1	静止糸切り。④回転ナデ	体・底部境目に深い沈線有	D-2 ×
136	高 环	15.9	12.15	台形通し。切り込み(二方向)+沈線		E-1 ×
137	“		約9.75	切り込み(二方向)	片側「Y」形	D-1 ×
138	鉢	14.8	約7.2	④削削り+回転ナデ、4条の沈線		D-2 ×
139	“		約5.0	静止糸切り。④回転ナデ	④施記号	C-2 ×
140	長 环 瓶	11.0	約5.7	回転ナデ	口縁部	D-1 ×
141	“	15.6	約5.8	“		C-2 ×
142	短 环 瓶	8.0	5.6	④削削り(底部)+削削り後ミズヒキ		E-1 ×
143	小 形 盖		約6.5	静止糸切り後ナデ。回転ナデ	④自然輪削離	D-2 ×
144	長 球 盖		約16.4	回転ナデ	腹部、紐の剥離痕有	E-2 ×
145	小 形 盖		約7.1	削削り下半部④削削り、袖回転ナデ	高台付	C-2 ×
146	蓋		約10.25	④平行叩き後カキ目	綱部片、円孔有	D-2 ×

## 須恵器

番号	形 詞	口径cm	器高cm	形態・手法の特徴	そ の 他	出 土 地 点
147	地	4.6	4.8	⑤粗い鉛削り+回転ナデ		D-2 17層上面
148	縁	9.7		⑤鉛削り+ミズヒキ	不完全沈線有	E-1 *
149	提 扇	7.0	13.3	回転ナデ	口部部、自然釉剥離	*
150	横 瓶	12.0	26.6	体部開口部円形粘土板で蓋をしている	肩部難記号 燒き台・自然釉付着	D-2 *
165	長 頸 壺	7.7	16.7	窪切り後ナデ、回転ナデ	ほぼ光形、自然釉付着	D-1 地山面P1内
166	环 盆	13.4	3.3	輪状つまみ、盤切り、⑤鉛削り+回転ナデ	重ね焼き痕	C-2 17層
167	*	14.8	3.0	*	*	*
168	*	14.6	3.2	*	⑤鉛削り+回転ナデ	⑤異色有、重ね焼き痕
169	*	14.0	2.3	輪状つまみ、盤切り後ナデ 鉛削り後ナデ+回転ナデ	重ね焼き痕	*
170	*	14.75	1.8	宝珠状つまみ・かえり	⑤難記号、⑤自然釉付着	D-1 *
171	*	12.5	3.4	宝珠状つまみ。⑤鉛削り+回転ナデ		C-2 *
172	环 身	9.0	2.6	盤切り、⑤回転ナデ		C-1 (西) 17層
173	高台付环	10.8	4.2	窪切り後ナデ。⑤鉛削り+回転ナデ		C-2 17層
174	*	15.0	4.9	*	⑤回転ナデ	D-2 *
175	*	14.2	4.0	⑤鉛削り+回転ナデ		C-2 *
176	*	13.0	4.9	静止糸切り、⑤回転ナデ		*
177	*	14.5	5.8	静止糸切り後ナデ、⑤回転ナデ	⑤難記号	*
178	*	15.0	5.45	回転糸切り、⑤回転ナデ	底部⑤爪痕	E-2 *
179	高 壺	6.6	5.8	切り込み(二方向)	环形難記号	D-2 17層
180	*	6.5	5.0		脚部難記号	C-1 (西) 17層
181	高台付壺	6.4	4.4	窪切り後ナデ。⑤回転ナデ		C-2 17層
182	壺	7.2	8.8	*	自然釉付着、重ね焼き痕	E-1 *
183	壺	7.3	8.8	盤切り、⑤鉛削り+回転ナデ、沈線		C-1 (西) 17層
184	壺	20.8	7.3	頸部沈線・回転ナデ	肩部焼成有、⑤自然釉付着	*
185	*	9.0	18.4	⑤平行引き後カ目、肩・底部別々に成形		C-2 17層
186	*	9.0	15.4	沈線+波状文、回転ナデ	口部部	E-1 *
187	*	19.2	29.5	6 口部沈線・回転ナデ	自然釉剥離	C-2 *
188	壺	9.0	16.5	内孔(4所)、底部難離削り、他回転ナデ		*
192	环 盆	12.4	3.6	体部中央に腰。口縁内面に薄い沈線有	自然釉付着	D-2 16層
193	*	8.4	2.8	かえり、施切り、回転ナデ	小形品、重ね焼き痕	C-1 (西) 12層
194	*	9.6	9.5	宝珠状?つまみ鉛離・かえり、⑤鉛削り+回転ナデ	⑤自然釉付着	D-1 9層
195	*	13.8	2.9	輪状つまみ	自然釉付着	D-2-E-2間桂 15層
196	环 身	11.0	3.25	窪切り後ナデ、回転ナデ	⑤難記号、⑤自然釉付着	C-1 (西) D-1間桂 12層
197	*	10.6	2.7	*	⑤鉛削り+回転ナデ	C-1 (西) 8層
198	*	9.2	3.6	窪切り、⑤回転ナデ		E-1 9層
199	*			窪切り後ナデ。⑤鉛削り+回転ナデ	⑤難記号	D-2 12層
200	*	11.2	2.75	窪切り、⑤回転ナデ		D-1 8層
201	*	11.2	3.45	窪切り後ナデ。⑤鉛削り+回転ナデ	⑤自然釉付着	C-2 10層
202	*	16.0	2.75	回転糸切り、回転ナデ	重ね焼き痕	E-2 12層
203	低脚付壺	4.1	4.1	切り込み(二方向)、⑤回転ナデ		C-2 *
204	环 盆・身	2.8	2.8	回転ナデ	重ね焼き痕	D-2 9層
205	高 环	14.9	9.45	三角形透し(二方向)		D-1 *

## 須恵器

番号	形	縦	口径(cm)	基高(cm)	形態・手法の特徴	その他の 記号	出土地点
206	高 壺		物 8.2	切り込み(二方向)		重ね焼き底	C-1 (西)・D-1 間壁12層
207	"		物 6.4			竹籠文2つ有	C-1 (西) 12層
208	"		物 8.1				" "
209	"		物 3.3			②節状痕(赤茶褐色)	D-1 "
210	"		物 8.6	低脚型			C-1 (西) "
211	壺		物 14.6	底切り、④鉛削り+回転ナデ		底部②指輪状底有	D-2 "
212	壺	7.6	物 4.9	腹部ボタン状飾り有、回転ナデ			D-1 9層
213	"	6.1	物 3.6	②沈線有、回転ナデ			C-1 (西)・D-1 間壁12層
214	瓶		物 7.7	口縁部凹凸ナデ			C-1 (西) 12層
215	"		物 8.2	②平行叩き有			E-1 9層
216	"	24.4	物 13.2	②沈線有、口縁部・④回転ナデ、袖叩き		把手付	D-2 "
217	"		物 13.2	②底部端平行叩き・側面毛目、④回転ナデ、円孔有		②穿孔時の指押痕有	E-1 "
218	壺			沈線+波伏文、回転ナデ		口縁部②自然釉剥離	D-2 "
219	"	27.2		回転ナデ		②竹文有、④自然釉付着	E-2 "
220	"	43.2	物 12.8	沈線+波伏文、回転ナデ		口縁部	D-1 "
221	"	36.2	物 15.8	" "			E-1 "
222	横 瓶	13.0	物 3.4	回転ナデ		頂部②指輪状痕有	E-1 12層
223	壺						
224				②鉛削り後ナデ+④回転ナデ		イガラビ1号出土七足とは別個	C-2・D-2 間壁 5層
225	灯 明 盆		3.0	三段型一体成形、回転糸切り、回転ナデ		底の可能性有	C-1 (西) 8層
226				底部②カキ目、脚部刷毛目有			C-2・D-2 間壁 9層
227						脚部三角柱状	D-2 8層
228						底ノ奥C造跡特殊土器片	" 9層
242	环 身	9.0	4.2	底切り、④回転ナデ			G-1 7層
243	低脚付壺		物 2.8	②回転ナデ		脚部	F-1 "
244	壺	8.8	3.8	回転ナデ		脚部②指輪状底有	" "
245	壺	5.2	5.6	底切り、②鉛削り+回転ナデ、④回転ナデ		自然釉付着	G-1 "
246	"	6.4	7.0	" "		②自然釉付着	F-2・G-2 間壁 7層
247	"	6.0	6.45	②鉛削り+回転ナデ		" (倒伏)	F-1・G-1 間壁 "
248	"	5.9	物 3.25	頸部一部沈線有、回転ナデ			" "
249	把 手					一部自然釉付着	G-1 7層
250	壺	16.6		口縁部回転ナデ		②自然釉付着	F-2 "
251	环 盖		物 2.65	宝珠状つまみ、回転糸切り、②鉛削り+回転ナデ			F-1 12層上面
252	环 身	11.4	4.4	回転糸切り、④回転ナデ			G-1 8層上面
253	小 形 盔		物 6.75	底切り、②鉛削り+回転ナデ、④回転ナデ		②自然釉付着(倒置)	" "
254	壺	6.4	6.5	②鉛削り+回転ナデ、④回転ナデ		自然釉付着	F-1 12層上面
255	"	6.2	6.7	底切り、②鉛削り+回転ナデ、④回転ナデ			" "
256	"		物 4.0	腹部ボタン状飾り有、②鉛削り+回転ナデ			" "
257	"	6.2	6.6	底切り、②鉛削り+回転ナデ			G-1 8層上面
258	"		物 4.8	" "		底外面粘土塗付着	" "
260	环 身	8.6	4.0	④回転ナデ		②自然釉付着	F-1 8層
261	"	8.8	3.2	回転ナデ		②鉛記号	" "

## 須恵器

番号	形	型	口径(cm)	底高(cm)	形態・手法の特徴	その他の	出土地點	
262	小 形 壺		φ26.2	2.6	縫切り。④鋸削り+回転ナデ		G-1 8層	
263	増		6.4	6.5	〃	④回転ナデ	自然釉付着 × 12層上面	
264	〃			機 5.1	〃	自然釉付着	× ×	
265	〃		6.0	4.7	回転ナデ	④自然釉付着	× ×	
267	底面付环			φ23.06	④回転ナデ		F-1 12層	
268	环 蓋	13.15	4.5		突帯有。④鋸削り+回転ナデ		× 13層上面	
269	壇	6.2	6.2		縫切り。回転ナデ。肩部沈殿有	自然釉付着	× ×	
270	〃	5.6	6.0		〃	④自然釉付着	× ×	
271	〃		φ26.4.4		④鋸削り+回転ナデ, ④回転ナデ	自然釉付着	× ×	
272	長 箱 壺			φ26.11.1	〃	〃	× ×	
277	环 身	10.7	2.8		④鋸削り後回転ナデ, ④回転ナデ	底外面粘土塊貼付	G-1 5層	
278	环(身)				静止糸切り	重ね焼き痕	F-2 ×	
279	増	6.0	7.0		縫切り後ナデ, ④鋸削り+回転ナデ, ④回転ナデ	④自然釉付着	F-1 ×	
280	〃		φ26.3.4		縫切り。④鋸削り+回転ナデ。沈殿有		G-2 ×	
281	环 蓋	10.8	1.5		つまみ無・かえり、縫切り。④回転ナデ	④自然釉剥離	H-1 4層	
282	环 身				同軸糸切り		H-2 5層	
283	蓋	17.2	φ26.4.3		回転ナデ		I-2 3層	
284	小 形 盒 又は 鏡					④自然釉付着(側面)	H-2 5層	
285	壇	5.8	5.75		縫切り。④鋸削り+回転ナデ, ④回転ナデ		I-1 4層	
286						暗茶灰色	C-3 表土	
287	灯 明 盒		φ2.0		糸切り	④自然釉付着	× 2層	
288	环 蓋	14.6	3.2		輪状つまみ。④鋸削り+回転ナデ	灰かぶり	土器櫃里 I	
289	〃	15.6	2.35		〃	④鋸切り。④鋸削り+回転ナデ	重ね焼き痕	× ×
290	环 身	11.6	3.6		回転糸切り。④回転ナデ		× ×	
291	〃	14.8	4.5		回転糸切り後ナデ, ④回転ナデ		× ×	
292	高台付壺	13.2	4.9		縫切り後ナデ。④回転ナデ		× ×	
293	〃	14.2	4.6		静止糸切り後ナデ, ④回転ナデ		× ×	
294	高 壺	13.3	φ26.3.8		④回転ナデ	環座	× ×	
295	鉢	16.9	7.6		④鋸削り+回転ナデ	④自然釉剥離	× ×	
296	〃		φ26.5.0		回転糸切り。④鋸削り+回転ナデ		× ×	
304	环 蓋	15.2	2.96		輪状つまみ。縫切り後ナデ, ④鋸削り+回転ナデ	大井頭心竹管文有 重ね焼き痕	SB-01P1内	
305	环 身		φ26.2.0		静止糸切り		× × ×	
306	高台付壺		φ26.2.9		縫切り後ナデ。④回転ナデ		× × ×	
307	〃		φ26.3.1			磨滅	× × ×	
308	〃	13.0	4.5		静止糸切り。④回転ナデ		× × ×	
309	〃	13.6	4.9		〃	④自然釉付着。重ね焼き痕	× × ×	
310	高 壺		φ26.7.6		切り込み(二方向)		× × ×	
316	蓋	15.5	3.8		糸切り。④回転ナデ	高台付	× × P7内	
332	环 蓋	14.1	4.2		輪状つまみ。④鋸削り+回転ナデ	ほぼ完形。重ね焼き痕	SD-02内	
333	〃	15.5	φ26.3.8		静止糸切り	輪状つまみ剥離痕有	× × 3群	
334	〃	13.8	2.75		輪状つまみ。縫切り後ナデ	④自然釉付着	× × 1群	
335	〃	15.6	2.6		〃	④回転ナデ	ほぼ完形。灰かぶり 重ね焼き痕	× × 4群

## 須 惠 器

番号	形 態	口径(cm)	器高(cm)	形 態・手 法 の 特 徴	そ の 他	出 土 地 点
336	环 身		9.0	静止系切り。回転ナデ		C-3 SD-02内1群
337	"	15.4	4.25	糸切り。回転ナデ。沈縫状凹線有		" " 5群
338	"	15.7	5.5	縫切り。④鉛削り+回転ナデ		" " 2群
339	高台付环	13.5	4.7	静止糸切り後ナデ。④回転ナデ		" " "
340	壺		5.3	一条の沈縫。回転ナデ		" " 4群
357	壺	43.2	22.5	口縁部擦状工具によるナデ。端部平坦	把手付、表面剥離。施成不良	SK-16内
358	环 盖	15.6	2.1	輪状つまみ。天井部内面比線状カキ目	④自然釉付着	SB-01内
359	环 身	14.1	4.9	静止糸切り。④回転ナデ		" "
360	高台付环	12.8	4.8	静止糸切り後ナデ。④回転ナデ	ほぼ完形	" "
361	横 瓶	5.55	22.65	体部の叩き目不明確	肩部施記号。燒き合谷付	" "
362	壺	15.5	5.6	肩部④平行叩き。他回転ナデ		SB-01床面10群
364	壺	20.0	10.8	口縁部回転ナデ	自然釉付着	斜平底土器包含層
377	小 形 壺		2.0	鉛切り。④回転ナデ	④自然釉付着	D-3 SD-01底面
380	环 身	15.4	5.0	静止糸切り。④回転ナデ	重ね焼き痕	地山面
381	小 形 壺	6.6	2.0		短輪型?	" "
384	环 身	13.0	2.5	回転ナデ		灰 土
385	盖 瓶	14.0	3.2	"	頭部施記号	不 明
386	"	17.6	8.3	"	"	"

## 土 師 器

番号	形 態	口径(cm)	器高(cm)	形 態・手 法 の 特 徴	そ の 他	出 土 地 点
18	环	7.8	1.2		小形品。磨滅	B-1 8層
19	壺			ナデ		A-2 "
20	壺	20.2	3.7	肩部④鉛削り。他ナデ		B-1 "
21	壺					" "
32	壺	15.8	19.0	肩部鉛削毛目。他ナデ		B-2 11層
64	环			静止糸切り	磨滅	A-2 3層
65	長 頸 壺		7.0	赤色塗彩。沈縫有(二条)。回転ナデ	頸部	A-1 7層
66	把 手				小形品	B-1 3層
87	"					" 7層
151	环			赤色塗彩。嘴文(円錐)有。鍛切り後ナデ		D-2 17層
152	"			鍛切り後ナデ。回転ナデ		17層上面P内
153	壺	15.2	3.2	肩部④鉛削り。他ナデ		C-1 (西) 12層下部
154	"	22.8	4.2	" "		" "
155	"	20.4	9.5	口縁部回転ナデ。肩部鉛削毛目④鉛削り		D-2 17層上面
156	"	23.6	4.0	" 肩部④鉛削り	肩部④磨滅	C-2 "
157	把 手			窓調整		" "
158	"					" "
159	壺					D-2 "
160	土製支脚		11.6	三叉突起		E-1 "
161	"		16.1	"		" "
162	小形白唐 空土製品		2.75	上部8面。上下に円孔(径3.75 mm)有	施付着?。36.45 g	" "

## 土 器

番号	形 態	口径cm	器高cm	形 態・手 法 の 特 徴	そ の 他	出 土 地 点
189	环		9.8	赤色绘彩。縁切り後ナデ	磨滅	C-2 17層
190	甌			⑤回転ナデ	×	E-2 2
191	甌	22.0	5.6	口部回転ナデ、底部⑤磨削り	×	C-2 2
229				内外面カキ目		C-2・D-2 間畦 10層
230	环			赤色绘彩、回転糸切り	磨滅	9層
231	盃・甌	21.4	9.9	10.0 口縁部⑤回転ナデ、脚部⑤磨削り、他刷毛目	脚部⑤黒斑有	C-1 (西) 12層
232	甌	30.0	19.7	脚部⑤刷毛目⑤磨削り、他回転ナデ		E-2 9層
233	甌					×
234	七製支輪		18.1	三叉突起		C-1 (西) 12層
235	甌		12.8	×		D-1 8層
259	甌	20.3	8.5	⑤口縁部回転ナデ・他刷毛目		F-1 12層上面
273	板 甌 盆	10.65	8.7	ナデ	ほぼ完形、⑤指押痕・黒斑有	13層上面
274	甌	12.2	8.0	沈痕有、⑤口縁部回転ナデ・他刷毛目	⑤磨滅	×
297	环	12.7	3.0	赤色绘彩(乳暉)	磨滅	C-3 土器溝り1
298	甌			⑤回転ナデ		×
299	板 甌 盆	11.8	8.5	4.5 回転ナデ	⑤黒斑有	×
300	把 手			断面扁平	301と同一個体	×
301	甌		8.5	断面扁平	把手付、磨滅	×
302	把 手			断面扁平	300, 301と同一個体の可能性有	×
303	甌			体部外縫接合		×
311	环			赤色绘彩、静止糸切り		SB-01 P1内
312	甌	18.0	2.6	赤色绘彩、ロクロ回転糸切り(向心内痕有) ⑤回転ナデ		×
313	甌	16.0	2.0	赤色绘彩(乳暉)	磨滅	×
314	七製支輪			円孔有		P6内
315	甌			×		土器溝り2
317	环	16.3	9.9	3.3 赤色绘彩、回転ナデ		土器溝り2
318	甌	13.7	9.9	3.4 ⑤	体部⑤黒斑有、磨滅	土器溝り2
319	甌	14.4	9.8	3.9 同転ナデ	黒斑有	土器溝り2
320	甌	16.5	9.8	3.7 ⑤		土器溝り2
321	甌	14.5	9.8	3.0 ⑤		土器溝り2
322	甌	17.0	9.8	3.7 赤色绘彩(乳暉)	磨滅	土器溝り2
323	甌	13.8	9.8	3.0 ⑤		土器溝り2
324	甌		1.5	赤色绘彩、縁切り、体底部堆積物剥り	底部⑤多方向に線痕有	土器溝り2
325	甌			⑤回転糸切り	底部⑤黒斑有	土器溝り2
326	甌		1.6	⑤糸切り後ナデ	磨滅	土器溝り2
327	甌			糸切り	・	土器溝り2
328	甌	13.0	9.8	3.6 赤色绘彩(乳暉)	底部⑤黒斑有、磨滅	土器溝り2
329	高 环	16.2	9.8	2.5 赤色绘彩、回転ナデ	磨滅	土器溝り2
330	甌	26.0	9.8	4.0 刷毛目	磨滅	土器溝り2
331	甌	29.5	9.8	4.0 刷毛目	・	SD-02内5群
341	环	10.3	9.8	2.35 赤色绘彩(乳暉)	・	SD-02内5群
342	甌	14.8	9.8	3.1 ⑤	・	SD-02内5群

## 土 器

番号	形態	口径 cm	底高 cm	形態・手法の特徴	その他の	出土地点
343	坏	9.0	1.5	赤色塗彩(多様)	磨滅	C-3 SD-02内6号
344	"	9.0	1.9	"	"	" 3群
345	"	9.0	1.7	赤色塗彩	"	" 6群
346	"	9.0	2.4	赤色塗彩(多様)	"	" 5群
347	"	9.0	1.8	"	" 342と同一個体の可能性有	" 3群
348	皿	18.8	3.0	赤色塗彩、口縁部回転ナデ	"	" 4群
349	"	20.1	2.2	赤色塗彩(剥離)	"	" 3群
350	"	21.9	2.0	"	"	" 4群
351	"			赤色塗彩、口縁部回転ナデ	"	" 3群
352	瓶・壺類	19.4	21.6	肩部④カキ目、底ナデ	磨滅	" 2群
353	"	21.2	6.6	肩部④カキ目、口縁部回転ナデ	磨滅	" 5群
354	"	24.0	13.2	肩部④カキ目、口縁部回転ナデ	"	"
355	肥 手			断面扁平、底部外周接合	"	" 6群
356	"				"	"
363	坏	15.4	3.7	赤色塗彩、回転余切り、回転ナデ		SB-01底面
365	坏	13.5	9.0	4.15 赤色塗彩(多様)	土馬の脚(地)もどき	削平部器包含層
366	坏	14.1	2.9	"	磨滅	" "
368	"	15.8	9.0	3.3 "	口縁部、磨滅	D-3 SD-01内6層
369	"	15.0	2.8	赤色塗彩、回転ナデ	"	" "
370	"	15.4	9.0	3.15 赤色塗彩(剥離)	磨滅	" "
371	"			赤色塗彩、回転ナデ	"	" "
372	"			"	磨滅	" "
373	"			回転ナデ	高台部	" "
374	"			赤色塗彩(剥離)	磨滅	" "
375	"			赤色塗彩	" "	" "
376	皿	15.6	2.3	" 回転ナデ	"	" "
378	坏	16.6	2.5		磨滅	SD-01底面
379	甕	24.5		回転ナデ	" "	" "

## 陶 磁 器

番号	種類	形態	口径 cm	底高 cm	形態・手法・その他	出土地点
3	破 器	つまみ			白磁、中國產?	B-1 10層上面P内
81	陶 瓶				常滑焼、④自然粘付着	" 3層
82	"	廣 鉢			備前焼	" "
83	"	皿	28.0	9.0	龜山燒系統、磨滅	C-1 (東) 6層
163	"				" ④平行叩き、④カキ目	C-2 17層上面
240	"				" ④格子叩き "	D-1 + E-1間壁表土
241	"				" ④平行叩き "	D-1 5層
382	"				高台付(削り出し)、④回転ナデ	G-3 表土
383	"	罐 鉢			近世以降、口縁部、回転ナデ	" "
388	"	皿			高台付(削り出し)、物有、砂目窓(重ね焼き窓)	不明

## 土馬(須恵質)

番号	形	態	部	位	性	別	形	態	手	法	の	特	徴	そ	の	他	出	土	地	点	
22																	B-1	8層			
66	模	馬	右	後	肢	雄	男根(粘土貼り付け)・肛門孔有						現存長	14.6cm	A-1	6層					
69	"	脚	表	現	なし		肛門孔有						"	10.8cm	B-1	7層					
70															"	3層					
71																A-1	6層				
72															"	7層					
73																B-1	6層				
74							牛の脚?									A-1	4層				
75							牛の脚?	74と同一個体?								B-1	3層				
76															"	"					
77																A-1	4層				
78																B-1	C-1(東)間隣	6層			
236	模	馬	脚			雄	男根(粘土貼り付け)有, 錫成前神改塗赤褐色に發色						現存長	7.4cm	D-1	E-1(同)9層					
237																D-1	9層				
238															"	5層					
239																E-1	8層				
275	模	馬	脚	表	現	現	表現なし									現存長	7.8cm	F-1	12層		
387	"	"	"	"	"		肛門孔有						"	5.6cm			第七				

## 土縄(土師質)

番号	形	態	長	さ	cm	径	cm	重	量	g	色	調	成	形	状	態	出	土	地	点
390	管	状	2.0		1.3	2.5		赤	褐	色	卷	き	付	け	ほ	ば完	B-1	2層		
391	"		3.1		0.8	1.6		"			"		"		"	"	B-2	3層		
392	"		3.7		1.2	3.8		青	褐	褐	色	"	"	"	"	A-1	"			
393	"		3.55		1.45	6.0		黄	褐	褐	色	"	"	"	"	"	"	"		
394	"		3.7		1.5	6.3		培	褐	褐	色	"	"	"	"	B-1	"			
395	"		3.95		1.5	8.0		赤	褐	褐	色	"	"	"	"	"	"	"		
396	"		(3.0)		0.7	(1.15)		淡	赤	褐	褐	色	"		約	1/6欠	A-1	"		
397	"		(2.7)		0.75	(1.2)		淡	黄	褐	褐	色	"	"	"	"	B-1	"		
398	"		5.1		2.5	(26.6)		暗	茶	褐	褐	色	"	"	"	"	B-2	6層		
399	"		(2.5)		0.8	(1.25)		赤	褐	褐	色	"		約	1/4欠	B-1	3層			
400	"		(2.7)		0.75	(1.0)		"				"		約	1/4欠	"	2層			
401	"		(2.7)		0.8	(1.2)		黄	褐	褐	色	"	"	"	"	"	"	"		
402	"		3.15		0.8	(1.35)		赤	褐	褐	色	"	"	"	"	C-1(東)	6層			
403	"		4.8		1.7	(9.0)		黄	褐	褐	色	"		約	1/6欠	A-1	7層			
404	"		(1.85)		0.85	(0.85)		赤	褐	褐	色	"		約	1/4欠	B-1	3層			
405	"		(2.75)		0.8	(1.35)		"				"	"	"	"	A-1	"			
406	"		(2.5)		0.8	(1.45)		棕	白	白	色	"	"	"	"	B-1	"			
407	"		(2.6)		0.9	(1.35)		赤	褐	褐	色	"		約	1/4欠	"	2層			
408	"		(2.15)		0.9	(0.8)		"				"	"	"	"	B-2	6層			
409	"		(1.95)		0.7	(0.85)		"				"	"	"	"	B-1	3層			

## 土鱗(土師質)

番号	形 態	長さ cm	径 cm	重 量(g)	色 調	成 形	状 態	出 上 地 点
410	管 状	(1.9)	0.75	(0.9)	淡 黄 褐色	巻 き 付 け	約 16 欠	A-1 6層
411	"	(2.6)	0.9	(1.2)	赤 褐色	"	"	B-1 2層
412	"	3.7	2.2	(8.0)	淡 黄 褐色	"	"	" 3層
413	"	(1.9)	1.1	(1.75)	赤 褐色	"	"	"
414	円 筒 形	2.5	2.45	11.85	淡褐色～淡赤褐色	"	ほぼ完形	" 2層
415	"	2.45	2.55	15.25	黄 褐色	"	"	" 3層
416	"	3.3	2.9	(24.45)	淡 褐色	"	約 16 欠	A-1 4層
417	"	3.0	2.8	(22.9)	"	"	約 16 欠	" 6層
418	"	2.3	(2.5)	(5.1)	黄 褐色	"	約 16 欠	B-1 3層
419	"	2.55	(2.7)	(7.8)	黄褐色～灰色	"	約 16 欠	A-1 4層
420	球 形	2.6	3.0	19.35	淡褐色～淡赤褐色、一部深褐色	"	ほぼ完形	B-1 3層
421	"	2.85	3.15	22.1	淡 黄 褐色	2 方 向 穿 孔	"	A-1 4層
422	"	1.65	2.45	(7.5)	赤 褐色	巻 き 付 け	約 16 欠	A-1-B-1間柱表土
423	"	3.2	(3.4)	(25.2)	淡褐色～赤褐色	2 方 向 穿 孔	約 16 欠	A-1 4層
424	纺 錐 形	3.0	1.7	5.8	黄 褐色	巻 き 付 け	ほぼ完形	B-1 2層
425	"	3.1	1.85	8.5	暗 黄 褐色	"	"	" 7層
426	管 状	4.05	1.8	(8.9)	暗褐色～橙白色	"	約 16 欠	B-2 8層
427	球 形	2.45	2.95	19.9	淡褐色～淡赤褐色	"	ほぼ完形	B-1 10層上面P1内
428	"	3.3	3.2	(23.75)	淡 褐 色	"	約 16 欠	A-1 地山面P1内
429	紡 錐 形	2.9	3.4	29.45	黑灰色～明褐色	"	ほぼ完形	A-2 11層
430	管 状	2.6	0.75	1.45	淡 赤 灰色	巻 き 付 け、磨滅	"	C-2 12層
431	"	3.85	0.8	2.1	淡 黄 褐色	巻 き 付 け、剥離	"	"
432	"	3.2	0.85	2.4	暗 褐色	巻 き 付 け	"	" 9層
433	"	2.76	1.05	2.6	"	"	D-1 "	
434	"	4.1	1.05	3.05	赤 褐色	"	"	" 5層
435	"	3.7	1.15	3.55	黄 褐色	"	"	"
436	"	3.7	1.55	6.25	黑 褐色	"	D-2 9層	
437	"	4.8	1.35	6.35	暗 灰 色	"	"	E-1 8層
438	"	3.4	1.75	8.2	灰白色～黑灰色	巻 き 付 け、磨滅	"	C-1 (西) 8層
439	"	4.2	1.7	8.7	淡 黄 褐色	巻 き 付 け	"	C-2 9層
440	"	4.3	1.75	9.15	淡 褐色	巻 き 付 け。ナデ調整	"	C-1 (西) D-1間柱12層
441	"	4.5	1.6	9.2	灰白色～暗灰色	巻 き 付 け	"	C-2 9層
442	"	4.0	1.8	11.0	暗 褐色	"	"	C-1 (西) 8層
443	"	3.7	2.0	11.1	灰 色	巻 き 付 け、磨滅	"	"
444	"	(2.7)	0.9	(1.6)	淡 黄 褐色	巻 き 付 け	約 16 欠	C-2 12層
445	"	(2.55)	1.1	(2.5)	赤 褐色	"	"	C-1 (西) 8層
446	"	(2.9)	0.8	(1.2)	"	"	約 16 欠	D-1表土
447	"	3.7	0.9	(2.2)	"	"	約 16 欠	C-1 (西) 8層
448	"	3.4	1.4	(4.75)	黑灰色～暗灰色	"	"	E-1 5層
449	"	4.6	1.75	(10.3)	暗 灰 色	"	"	" 4層
450	"	3.0	0.7	(0.95)	赤 褐色	"	約 16 欠	D-1 8層
451	"	(3.1)	0.9	(2.4)	淡 赤 灰色	"	"	C-2 9層

## 土種(土師質)

番号	形 種	長さ cm	幅 cm	重 量 (g)	色 調	成 形	状 態	出 土 地 点
452	管 状	(3.55)	0.9	(2.7)	灰色～黑色	巻き付け	約劣欠	C-2 12層
453	一	3.6	1.2	(6.7)	黄 橙 褐 色	一	一	8層
454	一	3.8	1.6	(8.25)	淡 黄 橙 褐 色	一	約劣欠	9層
455	一	(3.9)	1.2	(4.8)	黑 灰 色	一	約劣欠	一
456	一	(2.8)	1.4	(4.0)	黄 橙 色	一	約劣欠	一
457	一	(2.2)	0.7	(1.0)	暗 赤 褐 色	一	約劣欠	D-2 表土
458	一	3.3	0.75	(1.6)	赤 褐 色	一	一	D-1 9層
459	一	(4.4)	1.2	(5.2)	暗 褐 色	一	一	C-2 一
460	一	(3.5)	1.6	(7.6)	淡 黄 橙 褐 色	一	一	D-1 一
461	一	(2.7)	0.85	(1.8)	赤 褐 色	一	約劣残	C-1(西) 表土
462	一	(1.85)	0.9	(1.05)	一	一	約劣欠	D-1 9層
463	一	(2.25)	1.0	(1.4)	淡 黄 橙 褐 色	一	一	C-1(西)・D-1開跡 9層
464	一	(2.25)	0.95	(1.6)	暗 褐 色	一	一	C-2 12層
465	一	(2.15)	1.1	(1.85)	赤 褐 色	一	一	D-2 8層
466	一	4.0	(1.7)	(4.4)	暗 褐 色	一	一	C-2・D-2開跡 9層
467	円筒形	2.85	3.0	26.4	淡 黄 橙 褐 色	一方向穿孔?	ほぼ完形	C-2 12層
468	一	2.35	2.8	(12.8)	灰 白 色	二方向穿孔?	約劣残	C-1(西)・D-1開跡 9層
469	一	2.65	(3.2)	(18.05)	赤 褐 色	巻き付け	約劣欠	E-1 4層
470	球 形	2.3	2.45	11.55	淡赤褐色～黃褐色	巻き付け, 磨滅	ほぼ完形	D-1 9層
471	一	2.3	3.0	19.45	淡 黄 橙 褐 色	巻き付け	一	C-1(西) 9層
472	一	2.4	3.2	21.05	黄 橙 褐 色	二方向穿孔?	一	8層
473	一	2.85	3.2	29.25	淡 黄 橙 褐 色	巻き付け	一	D-2 8層
474	一	1.2	2.0	(3.5)	赤 褐 色	巻き付け?	約劣欠	E-1 表土
475	一	2.95	2.85	(19.4)	淡 褐 色	巻き付け。ナテ調整	約劣欠	C-1(西) 8層
476	管 状	(2.0)	0.55	(0.75)	赤 褐 色	巻き付け	約劣欠	F-1 2層
477	一	(1.95)	0.75	(0.8)	一	一	一	G-2 5層
478	一	(2.55)	0.8	(0.95)	一	一	約劣残	G-1 一
479	纺錐形	2.7	4.2	46.8	暗灰色～明褐色	二方向穿孔?	ほぼ完形	F-1 12層
480	管 状	4.2	1.3	6.2	赤 褐 色	巻き付け, 刻離	一	C-3 9層
481	円筒形	2.9	2.8	(18.65)	淡 黄 橙 褐 色	巻き付け	約劣欠	土器覆り
482	管 状	3.95	1.5	12.4	赤 色～明褐色	一	ほぼ完形	D-3 SD-01内 6層
483	球 形	3.0	3.6	(32.25)	灰 白 色	一方向穿孔?	約劣欠	一
484	一	3.05	2.6	(14.9)	黄 橙 褐 色	穿孔部片側削平	約劣欠	C-3 SB-01内
485	一	(2.2)	2.9	(13.3)	黄 橙 褐 色	巻き付け	約劣欠	SB-01床面
486	一	3.1	2.8	(15.2)	一	一	約劣欠	解平部土器包含層
487	管 状	2.9	0.75	1.3	赤 褐 色	一	ほぼ完形	表土
488	一	4.0	1.5	6.9	暗 灰 色	一	一	一
489	一	(3.3)	1.0	(2.9)	赤 褐 色	一	約劣欠	一
490	一	(2.3)	0.7	(0.75)	黄 橙 褐 色	一	約劣欠	一
491	一	(2.1)	1.1	(1.95)	赤 褐 色	一	一	一
492	一	(1.45)	0.75	(0.65)	一	一	約劣残	不明
493	一	(2.1)	0.8	(0.8)	一	一	一	拂土

## 土器(須恵器)

番号	形 態	長さ(cm)	径 (cm)	重 量(g)	色 調	成 形	状 態	出 上地 点
494	円筒形?	(1.85)	4.85		灰 白 色			A-1 3層
495	球 形	2.8	3.2	26.1	淡 青 灰 色	一 方 向 穿 孔	ほぼ完形	B-1 7層

## 土器(瓦質)

番号	形 態	長さ(cm)	径 (cm)	重 量(g)	色 調	成 形	状 態	出 上地 点
496	管 狀	3.95	0.9	2.85	赤 褐 色	卷 き 付 け	ほぼ完形	C-2 12層

## その他の遺物

番号	種 類	材 質	形 態	そ の 他	出 上地 点
29	石 鏡	黑 曜 石	卵型凸三角形, 最大長 2.25 cm, 最大幅 1.6 cm, 最大厚 0.4 cm		A-1 10層
84	角 釘	鐵	現存長 3.1 cm, 全剥落		B-1 4層
85	筒型鉄製品	*	現存長 1.6 cm, 最大径 0.9 cm, 全面錆		A-1 7層
164	石 鏡	黑 曜 石	卵型凸三角形, 最大長 2.4 cm, 最大幅 1.95 cm, 最大厚 0.5 cm		E-1 17層上面
276	古 鏡		『夏水造主』, 鏡面「文」, 遺存状態良好		F-2 表上
389	瓦 ?		印花文有		硬土

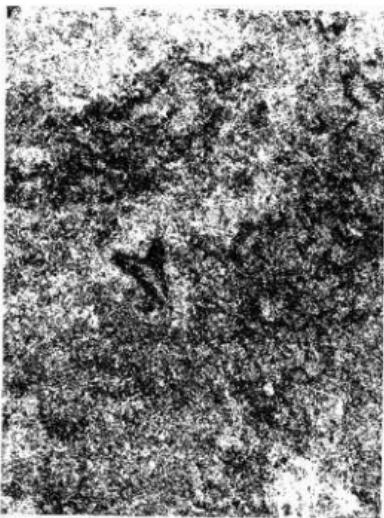


写真2 A-1区石鏡出土状況



写真3 E-2区電片出土状況

昭和60年度発掘調査前近景  
(西から東方谷間入り口  
方向を見る)



昭和60年度発掘調査風景



B-1・C-1(東)区間  
畦内土馬出土状況

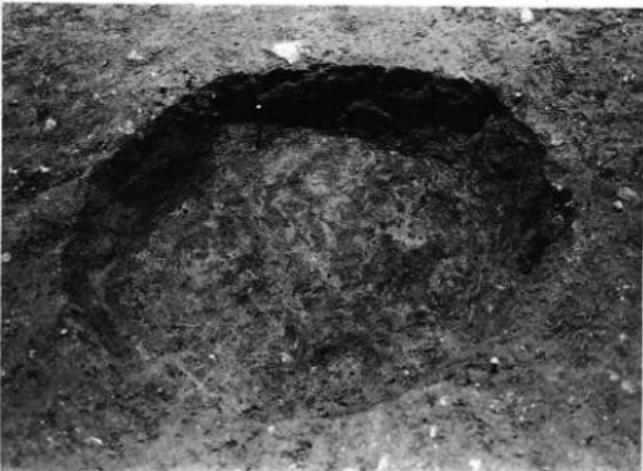




A-1～C-1(東)区第1  
造構面(A-1区南側は第  
2造構面)



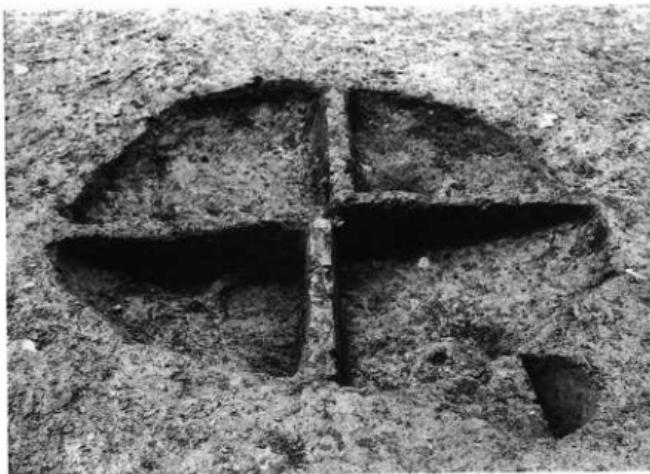
A-1区SK-01



A-2区SK-06



A-1～C-1(東)区第2  
遺構面(西から見る)



A-1区SK-02



B-2区第3遺構面

B - 1 区西壁



B - 2 区西壁



A - 2 区東壁





C - 1 (西) ~ E - 1 区  
第 1 造構面



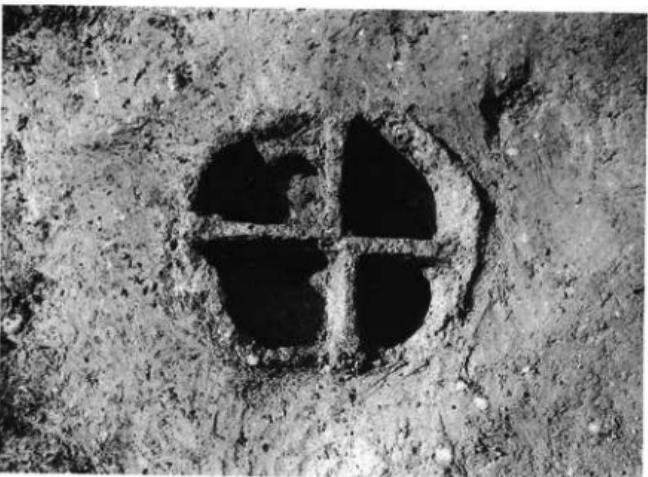
D - 2 区 第 1 造構面



D - 2 区 第 1 造構面  
土器出土状況



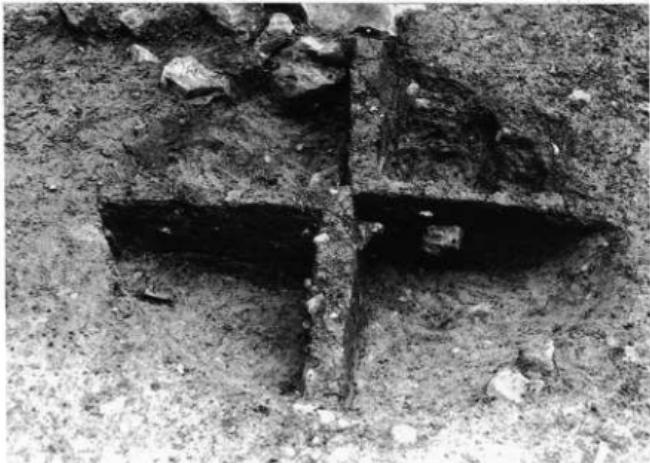
D-1区SK-03



D-1区SK-04



E-2区SK-07



D-2区SK-08



C-1(西)~E-1区  
第2遺構面



D-1区第2遺構面  
P1長頸壺出土状況

D-2区第3邊構面



C-2区西壁



C-1(西)区北壁





F - 1 区第1造構面  
(西から見る)



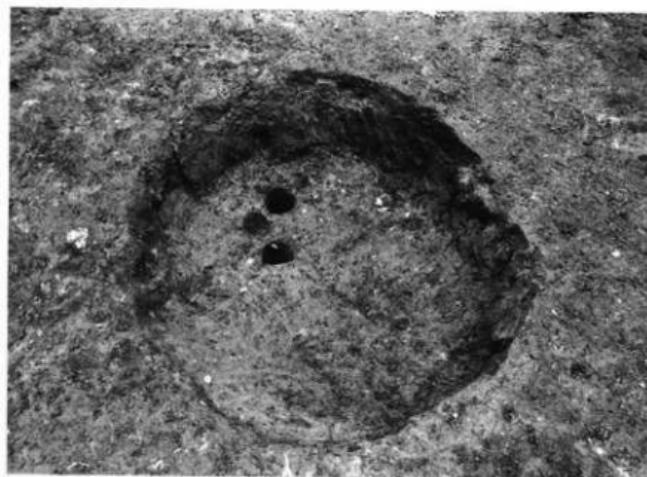
G - 1 区第1造構面



G - 1 区第2造構面



G-1区SK-10(1)



G-1区SK-10(2)  
掘り切り後



G-1区SK-11



F - 1 区第3造構面



F - 1 区SK - 09



F・G 区調査後全景  
(西から見る)



F-1区西壁



F-2区西壁



F-1区北壁